sa iki si sen sou i seki

佐伯市戦争遺跡

nô ka yama - naga sima yama - kou jin

濃霞山 - 長島山 - 興人

平成16・17年度遺跡分布及び残存状況調査報告書

（佐伯海軍航空隊庁舎）

2006

大分県

佐伯市教育委員会

佐伯市戦争遺跡

濃霞山 - 長島山 - 興人

平成16・17年度遺跡分布及び残存状況調査報告書

2006

大分県

佐伯市教育委員会

濃霞山・長島山　全景

佐伯海軍航空隊　陸上班
右から　機体整備所・第二指揮所・第三格納庫・第二格納庫・第一指揮所・第一格納庫

序　　文

佐伯市は大分県南部に位置し、沿岸部は豊後水道に臨む典型的なリアス式海岸を形成しており、天然の良港に恵まれています。また、内陸部は急峻な山々が連なる山間部であり、豊かな自然をもつ風光明媚で九州一広い面積をもつ都市です。

明治・大正期、佐伯湾ではたびたび海軍の演習が行われ、昭和に入ると佐伯海軍航空隊、佐伯防備隊などが次々に開設されます。戦時体制の下、軍事都市として発展した佐伯市は、真珠湾攻撃の出撃地となるなど先の大戦に深く関わり、戦争末期には海軍施設を中心に空襲の被害も経験してきました。

このたび初めて市内の戦争遺跡調査を行ったところ、海軍航空隊施設跡地周辺の濃霞山・長島山に当時の軍事施設がまだ多く残されていることがわかりました。これらの戦争遺跡は佐伯市の負の歴史をものがたる証人と言えるものであり、次の世代に伝えていくべきものとして戦争遺跡調査報告書をまとめました。

本書を教育及び学術研究に広く役立てていただき、過去の日本と佐伯の歴史について興味、関心をもっていただければ幸いに存じます。

最後に、調査にご協力を賜りました(株)興人佐伯工場、学校法人日本文理大学附属高等学校、佐伯重工業(株)、財務省九州財務局大分財務事務所、各遺跡所有者・管理者の皆様、資料をご提供くださいました皆様、調査を担当していただきました(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店をはじめ関係各位に対し、深くお礼申し上げます。

平成 18 年 10 月 31 日

佐伯市教育委員会
教育長　武　田　隆　博

例　　言

1. 本書は平成16・17年度に調査を実施した、佐伯市戦争遺跡の遺跡分布及び残存状況調査報告書である。
2. 本調査地点は佐伯市鶴谷町2丁目12427番6他・中江町12401番1他・東浜11763番他に所在する。
3. 本調査は佐伯市教育委員会の指導のもと、(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店が平成17年1月28日～3月22と平成18年1月30日～3月29日の間実施した。
4. 現地での遺構実測、写真撮影の各担当は下記の通りである。
   平成16年度〈遺構実測〉池田あゆ子・田中貴・宮吉正明・大谷伸宏
   平成17年度〈遺構実測〉五十川慎也・石川哲哉・大谷　〈写真撮影〉五十川・大谷
5. 航空写真撮影は九州航空株式会社が行った。
6. 表紙と口絵の航空隊写真は清水建設(株)から提供していただいた。記して感謝いたします。
7. 本書中の挿図、表、図版編集は佐倉めぐみ、池田、五十川、大谷が行った。
8. 本調査の記録資料は佐伯市教育委員会に収蔵、保管している。
9. 本書の執筆は第Ⅰ章を吉武牧子(佐伯市教育委員会)、第Ⅱ章を五十川、第Ⅲ～Ⅴ章を大谷、編集は吉武、大谷が行った。

凡　　例

1. 本書で使用した座標数値は日本測地系に基づく平面直角座標系第Ⅱ系を用い、方位は座標北である。
2. 遺構寸法単位は基本的にmを用いているが、10cm以下についてはcm、mmを適宜使用している。
3. 遺構番号は「特殊地下壕実態調査票」(S54都市内防空壕実態調査、H7～13特殊地下壕実態調査、平成16年度教委現地調査より)の整理番号に、今回の調査で新たに確認した遺構に番号を追加したもので、濃霞山・長島山・興人と名を冠し使用した。
4. 「遺構台帳」の壕の幅、高さの計測値について実数は開口部を、コンクリート等構造があるものは(　)内にその規模を示し、それに〈　〉がついているものは残存、計測可能数値を示す。延長、奥行の残存、計測可能数値も〈　〉とする。
5. 本文の記述用語は常用漢字を用いるが、引用資料等の固有名詞は原表記を尊重した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 調査体制 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的背景
1. 地理的環境 …… 2
2. 歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　調査の成果
1. 濃霞山 …… 4
2. 長島山 …… 11
3. 興　人 …… 23
第Ⅳ章　史料調査 …… 27
第Ⅴ章　まとめ …… 35

挿　図　目　次

第1図　佐伯海軍航空隊周辺施設配置図(国土地理院発行「佐伯」1/25000使用) …… 3
第2図　濃霞山8遺構実測図(1/120) …… 5
第3図　濃霞山19－34遺構実測図(1/300・1/100) …… 7・8
第4図　濃霞山27遺構実測図(1/120) …… 9
第5図　濃霞山30遺構実測図(1/120) …… 10
第6図　長島山6コンクリート基礎残存状況 …… 11
第7図　長島山11コンクリート製飛梁配置状況 …… 12
第8図　長島山6遺構実測図(1/200・1/100) …… 13・14
第9図　長島山8遺構実測図(1/150) …… 15
第10図　長島山11遺構実測図(1/150) …… 16
第11図　長島山26北遺構配置図(1/300) …… 17
第12図　長島山26南遺構配置図(1/300) …… 18
第13図　長島山30遺構配置図(1/400) …… 19
第14図　長島山30-3遺構実測図(1/150) …… 21・22
第15図　興人1遺構実測図(1/200) …… 23
第16図　「佐伯　地形圖」 …… 27
第17図　佐伯海軍施設航空写真解析図 …… 28

第 18 図 「佐伯海軍航空隊・居住區．水上隊．陸上隊格納庫・地帯略圖」 …… 30
第 19 図 「佐伯防備隊本隊施設圖」 …… 30
第 20 図 佐伯海軍航空隊飛行場爆撃時航空写真 …… 31
第 21 図 「興國人絹パルプ株式會社佐伯工場敷地實測圖」写 …… 32

表 目 次

第 1 表 遺構台帳 …… 24 ～ 26
第 2 表 佐伯防備隊兵器装備一覧 …… 29
第 3 表 年 表 …… 33･34

写 真 図 版 目 次

図 版 1 濃霞山（南西から） 長島山（西から）
図 版 2 長島山山頂機銃台座跡 掩体壕
図 版 3 濃霞山 1 濃霞山 5 濃霞山 8 濃霞山 11 濃霞山 13 標識 濃霞山 13
濃霞山 14 標識 濃霞山 14
図 版 4 濃霞山 15 標識 濃霞山 15 濃霞山 16・17 濃霞山 16 標識 濃霞山 16
図 版 5 濃霞山 17 標識 濃霞山 17 濃霞山 18 濃霞山 19 濃霞山 19 内部施工途中
図 版 6 濃霞山 34 濃霞山 23 濃霞山 27 濃霞山 28 濃霞山 30
濃霞山 30 開口部（壕内より） 濃霞山 39 濃霞山 43
図 版 7 長島山 5 ～ 11 長島山 6 長島山 8 長島山 9 長島山 11
図 版 8 長島山 11 被弾状況 長島山 13 長島山 15（長島山 15 は建物に内包）
長島山 15 長島山 17（右は障壁）
長島山 26 北全景 長島山 26 － 2 機銃台座 長島山 26 － 2 機銃台座軸受部
図 版 9 長島山 26 － 5 掩廠部天蓋 長島山 26 － 6 長島山 26 － 10 建物跡（正面より）
長島山 26 － 10 水槽縁に「髙」の字 長島山 30 － 1・8 ～ 11
長島山 30 － 3 開口部（壕内より） 長島山 30 － 3 開口部（壕内より）
長島山 30 － 6
図 版10 長島山 34(白線が範囲) 長島山 38 境界柱 興人 1 掩体壕 興人 3 興人 4

第 I 章 はじめに

1．調査に至る経緯

佐伯市には昭和初期に佐伯海軍航空隊、佐伯防備隊等が設置され、先の大戦に深く関わった軍都としての歴史がある。当時の航空隊庁舎は佐伯市鶴谷町に現存し、今は海上自衛隊佐伯分遣隊が使用しているが、隣接する兵舎建物は取り壊され、跡地は公園として整備されている。また、公園の一画には佐伯市平和祈念館やわらぎが建設され、航空隊関連の資料、遺品等を展示公開している。

この庁舎と兵舎を中心とした基地周辺には今でも当時の遺構がかなり残されており、中でも濃霞山・長島山一帯に残る地下壕群はかなりの数に及ぶ。しかし戦後 60 年が経過し、コンクリートの耐用年数等を考慮すると、今後遺構の崩壊が急速に進行することが予測され、現存する戦跡の保存整備について検討することとなった。そこでその前段階として、各遺構の正確な数と位置、保存状態について把握することを目的に調査を実施した。

調査は(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、平成 17 年 1 月 28 日～ 3 月 22 日までと平成 18 年 1 月 30 日～ 3 月 29 日までの 2 ヵ年で実施した。16 年度は濃霞山・長島山山頂部から山麓までの遺構の確認と分布図の作成及び一部地下壕の実測、17 年度は長島山地下壕と興人敷地内の掩体壕各 1 基の実測、写真撮影及び調査報告書作成を行った。

2．調査体制

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体 佐伯市教育委員会
調査責任者 佐伯市教育委員会 教育長 武田隆博
調査事務 佐伯市教育委員会社会教育課 課長 久保田成太
同 係長 亀井直美
同 副主幹 吉武牧子

調査担当
平成 16 年度 (株)埋蔵文化財サポートシステム 大分支店
大谷伸宏 田中 貴 石川哲哉 池田あゆ子 宮吉正明
平成 17 年度 (株)埋蔵文化財サポートシステム 大分支店
大谷伸宏 石川哲哉 佐倉めぐみ 執行敏秀 五十川慎也

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的背景

1. 地理的環境

当遺跡の所在する佐伯市は大分県の南東部に位置し、気候は温暖多雨を特徴とする南海型気候区にあたる。この地域の沿岸部は典型的なリアス式海岸を形成して、遠く紀伊・四国の両山地と連結し九州山地の一部となっている。山地から流れ出る水は支流を集め番匠川・堅田川・木立川となり、それぞれ佐伯湾に流入している。これら河川は上・中流域で規模の小さな谷底平野をつくり、下流域においては三角州を発達させている。この番匠川河口の三角州一帯に長島山・濃霞山・興人は立地している。

長島山・濃霞山は海岸形成時に残った島嶼であり、地質的には四万十帯に属し、大部分は砂岩や泥岩からなるが、濃霞山の一部に凝灰岩・凝灰岩質泥岩もみられる。土壌は砂岩・泥岩類を母材とする弱乾性の風化土壌である。長島山南側は以前、耕作地として利用されていたが現在は潅木に覆われ、濃霞山は公園として整備されている。一方、興人は、カキ、ハマグリなどの貝類が自生する干潟であったが航空隊建設にともない埋め立てられ、現在この一帯には多業種の企業が立地している。

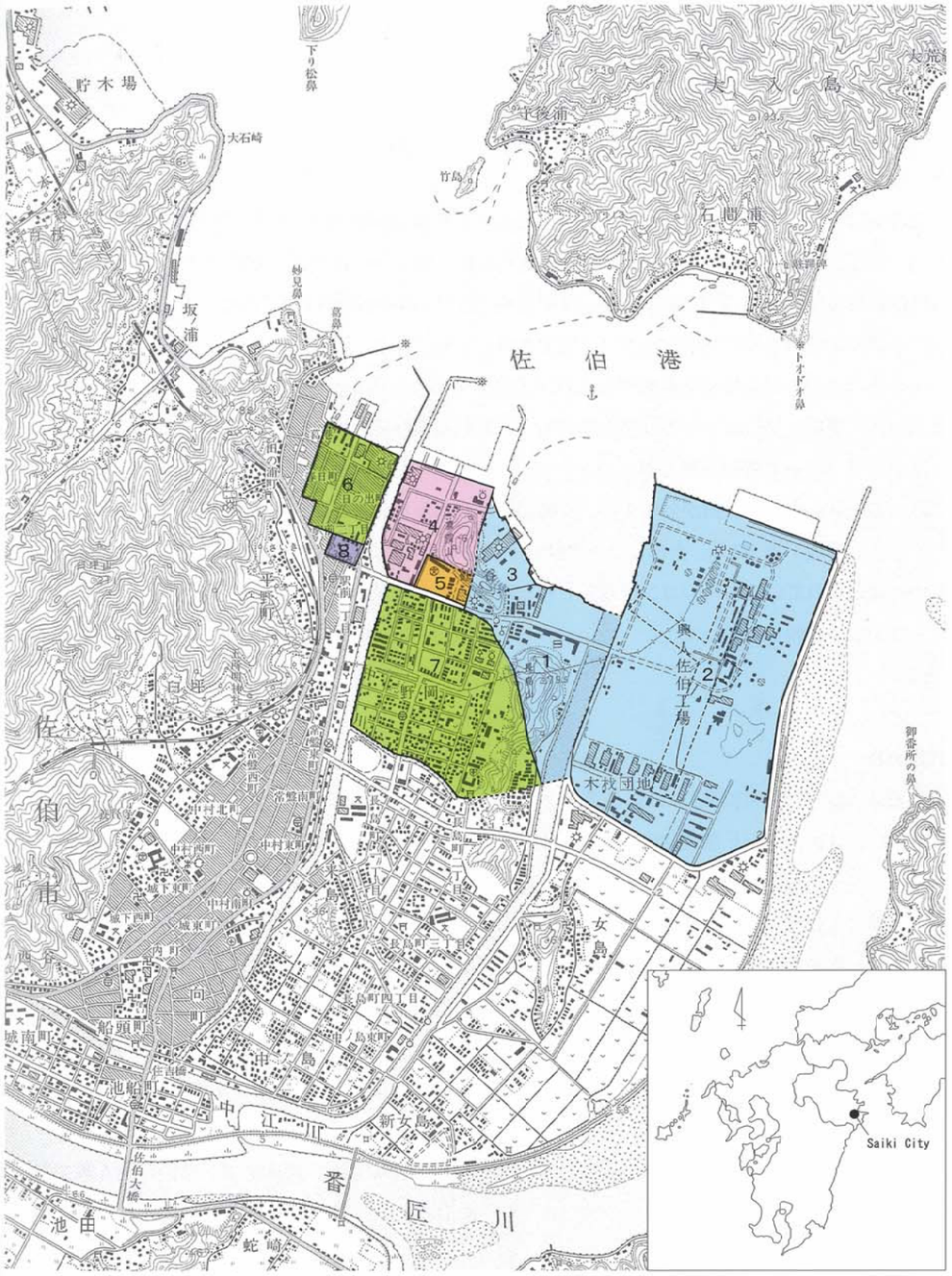
2. 歴史的環境

佐伯市の市街地は慶長６年に毛利高政が日田・玖珠から転封されて入部し、番匠川河口の八幡山山頂に城を築くとともに、その麓に城下町を建設し、以後、明治２年の版籍奉還まで毛利氏が佐伯藩を治めた。明治４年の廃藩置県の際佐伯県となり、明治８年には塩屋村・大船繋村とが合併し大分県第４大区26小区佐伯村となった。明治22年には市町村制が施行され佐伯町と改められ、昭和12年には上堅田村・鶴岡村を合併した。そして、昭和16年４月、八幡村・西上浦村・大入島村を合併し、市制を施行して佐伯市となった。明治16年には葛港が開築され、その後、道路や電気・水道など住環境整備も進み、大正５年には日豊線が佐伯まで延び、産業・経済・文化の中心地としての機能を果たした。佐伯と軍政の関わりは文久３年、女島沖ノ州に台場が築かれたことに始まり、明治の終わりから大正、続いて昭和にかけて、ほぼ毎年、艦隊が次々と佐伯湾に集結して訓練を行っていた。その後、昭和９年に佐伯海軍航空隊、昭和14年に佐伯防備隊が相次いで開隊し、昭和16年には真珠湾攻撃直前に佐伯湾で連合艦隊の演習が行われた。昭和20年８月15日に敗戦を迎えるまで佐伯も軍事一色に染まることになる。

【参考文献】

佐伯市史編さん委員会『佐伯市史』1974　　大分県『大分県史地誌篇』1989

大分県『大分県史近代篇Ⅳ』1988　　大分県『土地分類基本調査佐伯・鶴御崎５万分の１』1995



1. 佐伯海軍航空隊　2. 佐伯海軍航空隊飛行場　3. 佐伯海軍航空隊水上飛行場
4. 佐伯防備隊　5. 第12航空廠佐伯補給工場　6. 呉海軍軍需部佐伯支庁
7. 呉海軍軍需部佐伯支庁（工場倉庫群）　8. 呉海軍建築部佐伯支庁

第１図　佐伯海軍航空隊周辺施設配置図（国土地理院発行「佐伯」1/25000使用）

第Ⅲ章　　調査の成果

1. 濃霞山

概　要

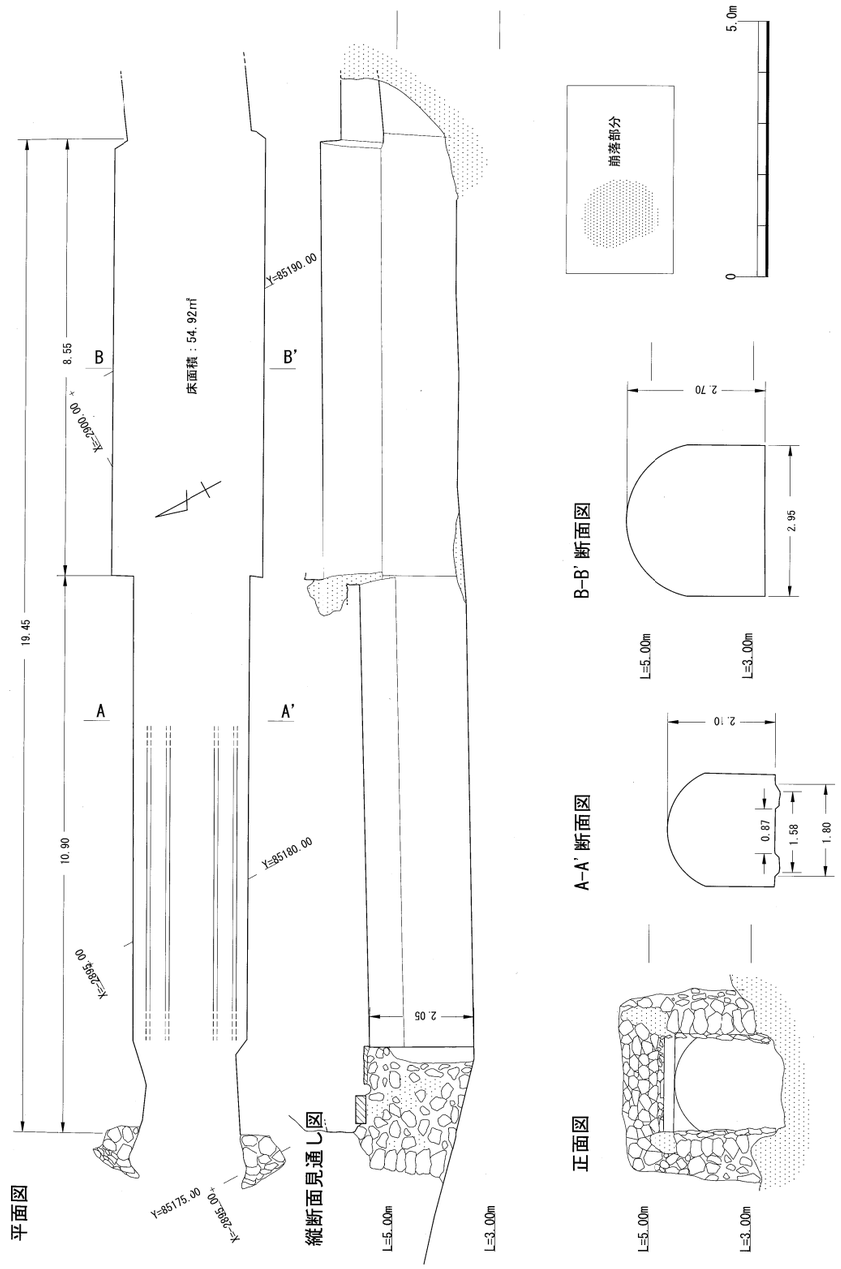
濃霞山は佐伯市鶴谷町二丁目に所在する。標高 62.00m、山稜は西に外湾しつつ南北に長く通る急峻な山である。面積は 80000 ㎡を測る。山の地質は基本的に砂岩より成るが部分的にチャートを含む。当時は佐伯海軍航空隊、第 12 航空廠佐伯補給基地、佐伯防備隊が境界を接する全面軍用地帯であったが、現在は濃霞山公園として整備され市民に開放されている。

山とその周辺に残る施設を概観すると以下の通りである。山頂部は配水関連の施設が残っているが、それ以外に遺構と見られるものは平坦部のみである。遺構の多くは山腹から山麓に分布する。山腹北部にはコンクリート造掩蔽建物２基、コンクリート巻立 (1) 造地下壕１基、素掘の壕１基、空爆の痕跡と見られる円形の窪地２ヶ所が分布する。山麓部は、北部から北西部にコンクリート造建物１基、コンクリート巻立造地下壕 12 基、南端にコンクリート造建物１基、コンクリート巻立造地下壕７基、門２対、東中部は削られているもののコンクリート巻立造地下壕１基が確認できた。その中で今回詳細に調査したものを以下に報告していく。

濃霞山８

濃霞山北辺西麓の標高 2.6 mに位置し、主軸をN－118°－Eにとる。総床面積は 54.92 ㎡、全長 19.45 m、コンクリート巻立造地下壕である。開口部は荒い石組モルタル造で、天井部は厚み 20cm の板状プレキャストコンクリート (2) を梁とする。開口部両脇は坑木の腐食により構造中に空間を生じている。壕は入口から 10.9 mのところまで幅 2.24 m、高さ 2.1 mで進み、その奥からは幅 2.95 m、高さ 2.7 mと広がる。繋ぎ目部分は空洞になり大小の礫が崩落し堆積している。さらにここから 8.55 m の地点で落盤し、完全に閉塞している状況である。床面には奥行 3.0 mの地点から 6.0 mほどのところまで２条の轍が確認できるが、その幅ではやや狭くなった開口部からは出入りできない。床面は轍跡より部分的にコンクリート打と判別できるが、諸々の堆積により覆われているため全体の造りは不明である。

構造は継ぎ足し部分と破断箇所を見るかぎり鉄筋は入っておらず、浸水していないが脆く雑である。



第２図　濃霞山８遺構実測図（S=1/120）

濃霞山 19・34

濃霞山北西部の標高 14.0 ～ 14.5 mに位置し、緩やかに張り出した稜線の中腹を貫通する。壁面厚さ 40cm のコンクリート巻立造の地下壕で、部分的に素掘り、全長 98.5 mを測る。19 の開口部は幅 2.5 m、高さ 2.45 mで、1 対のコンクリート障壁をもつが未完成である。壕内はコンクリート造モルタル仕上げで、床面に溝は無く、奥行き 26.75 mのところで素掘りとなる。素掘部分が 7.0 mつづいた後、再び両側に溝をもつコンクリート造に変わり、幅が 2.5 m、高さが 2.27 mとなる。この素掘り区間は工事途中で放置されているため、壕の施工過程を見ることができる。壕はさらに蛇行しつつ 17.9 m、次いで直線で 46.85 m伸び濃霞山 34 開口部に至る。34 側の障壁（厚さ 0.6 m）1 対は完成している。途中壕の脇には横穴が 5 箇所穿たれていたが、岩盤むき出しで大小の礫が積もり危険なため略測のみとした。34 開口部より 2 基目の横穴だけは直線で 15 m以上伸びていることが目視で観察できた。同じく 3 基目の切羽面には、削岩機による直径 3 cm の発破孔と思われる穿孔 3 箇所が、約 1.0 m間隔で認められた。構造は坑木等を含有する鉄筋無しのコンクリート巻立のため、壁は薄く脆い。破断浸水も数箇所見られる。

濃霞山 27

濃霞山南端、標高 2.0 mに位置し主軸を N－113°－E にとる。床面積 22.84 ㎡、全長 7.7 m、幅 3.0 m、高さ 3.15 m、厚さ 50cm のコンクリート巻立造地下壕である。開口部はモルタル面取り仕上げ、床はコンクリート打で、奥に向かい緩やかに 15cm 高くなっている。内部の造りは丁寧で、現在も内壁には破断、亀裂、浸水は見られず良好な状態を保っている。

濃霞山 30

濃霞山南端、標高 2.2 mに位置し、開口部から 9.21 m進んだ地点まで主軸を N－124°－E に取り、そこから先は北に 6° 切り返す。総床面積 67.7 ㎡、全長 28.03 m、幅 2.47 m、高さ 2.57 mの鉄筋コンクリート巻立造地下壕である。濃霞山 26 とつながっており、開口部あたりは上部公園敷地より流入した土砂で塞がれている。途中右手に 3.0 × 3.0 mの空間を持つ。浸水、目立った破断は奥の陥没を除いてみられないが、土かぶりが全体的に浅く、公園内遊歩道が直上を通っているため、土砂の流入によって公園内に地隙の生じる恐れがある。なお壕内床面は廃土等でほぼ埋まっており、それに関しての計測値は正確さを欠く。

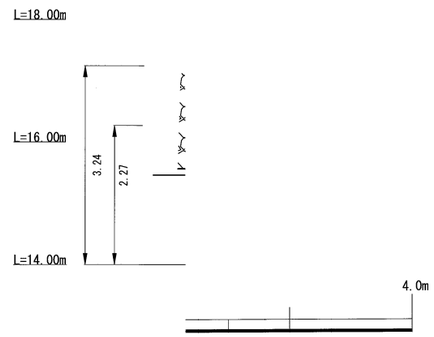
註 1　正しくは「巻立て」。トンネルの掘削面を被覆する構造体、覆工ともいう。

註 2　あらかじめ別の場所で製造したコンクリート部材、または製品。

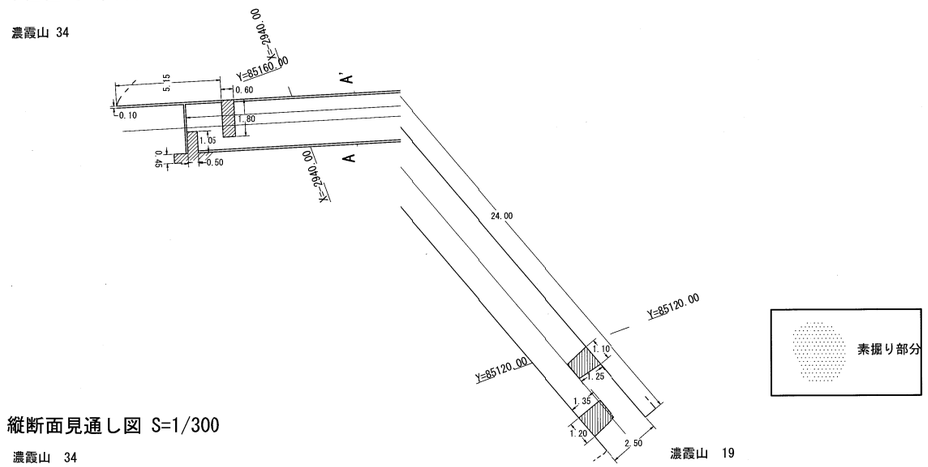
【参考文献】 社団法人日本コンクリート工学協会編 『コンクリート便覧』 1976

社団法人土木学会編 『土木用語大辞典』 1999

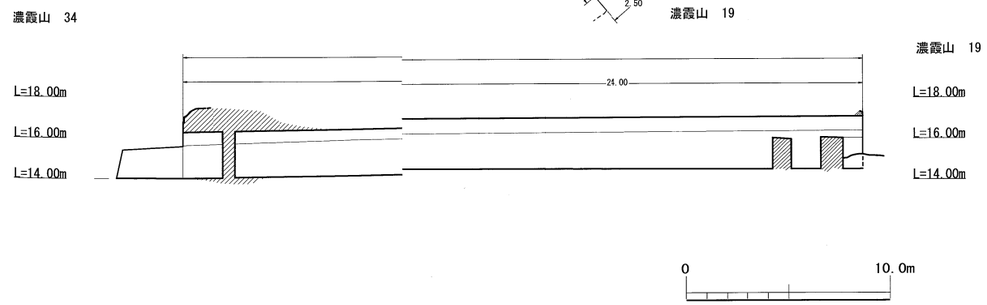
正面断面図　S=1/100



平面図 S=1/300



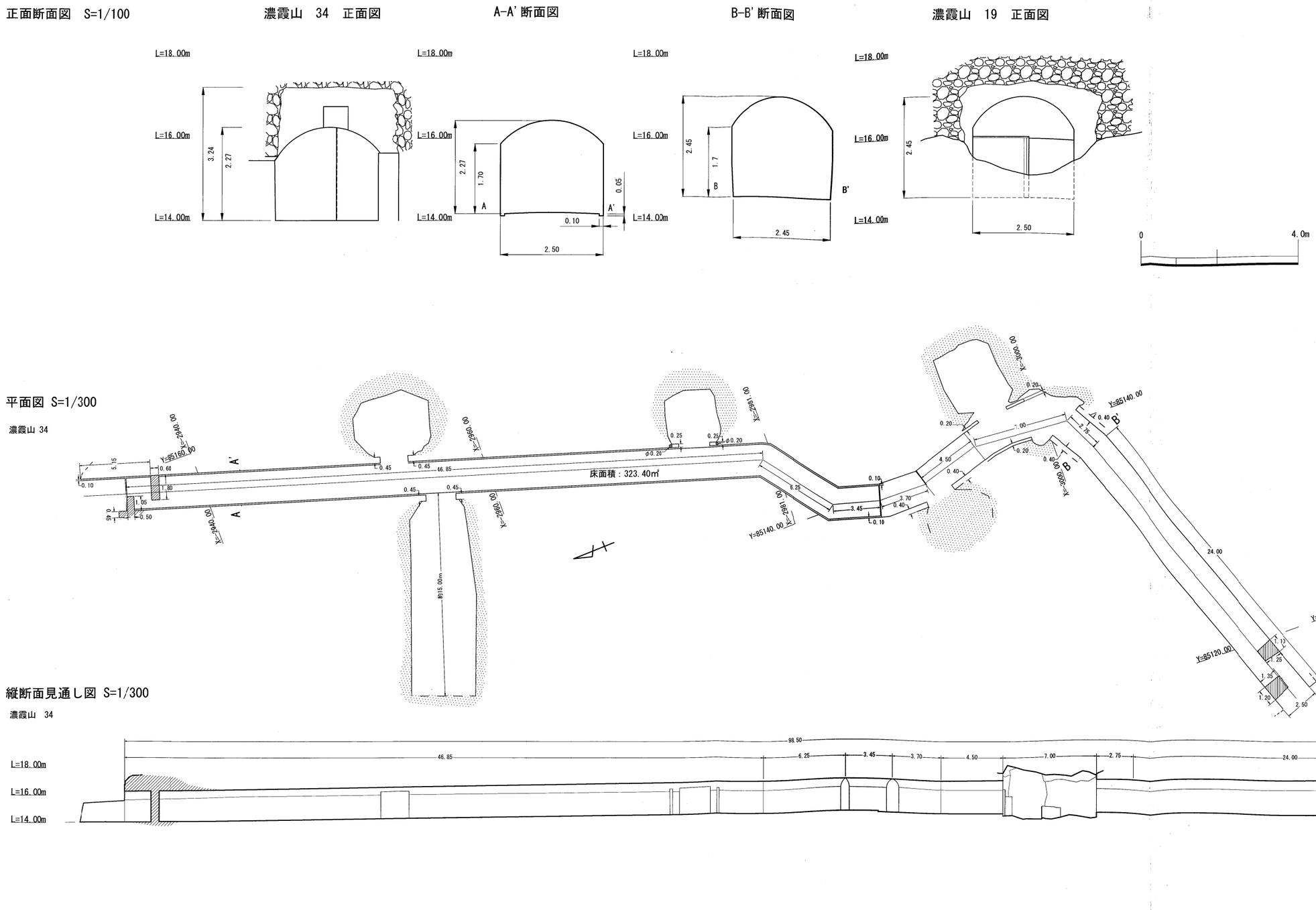
縦断面見通し図 S=1/300



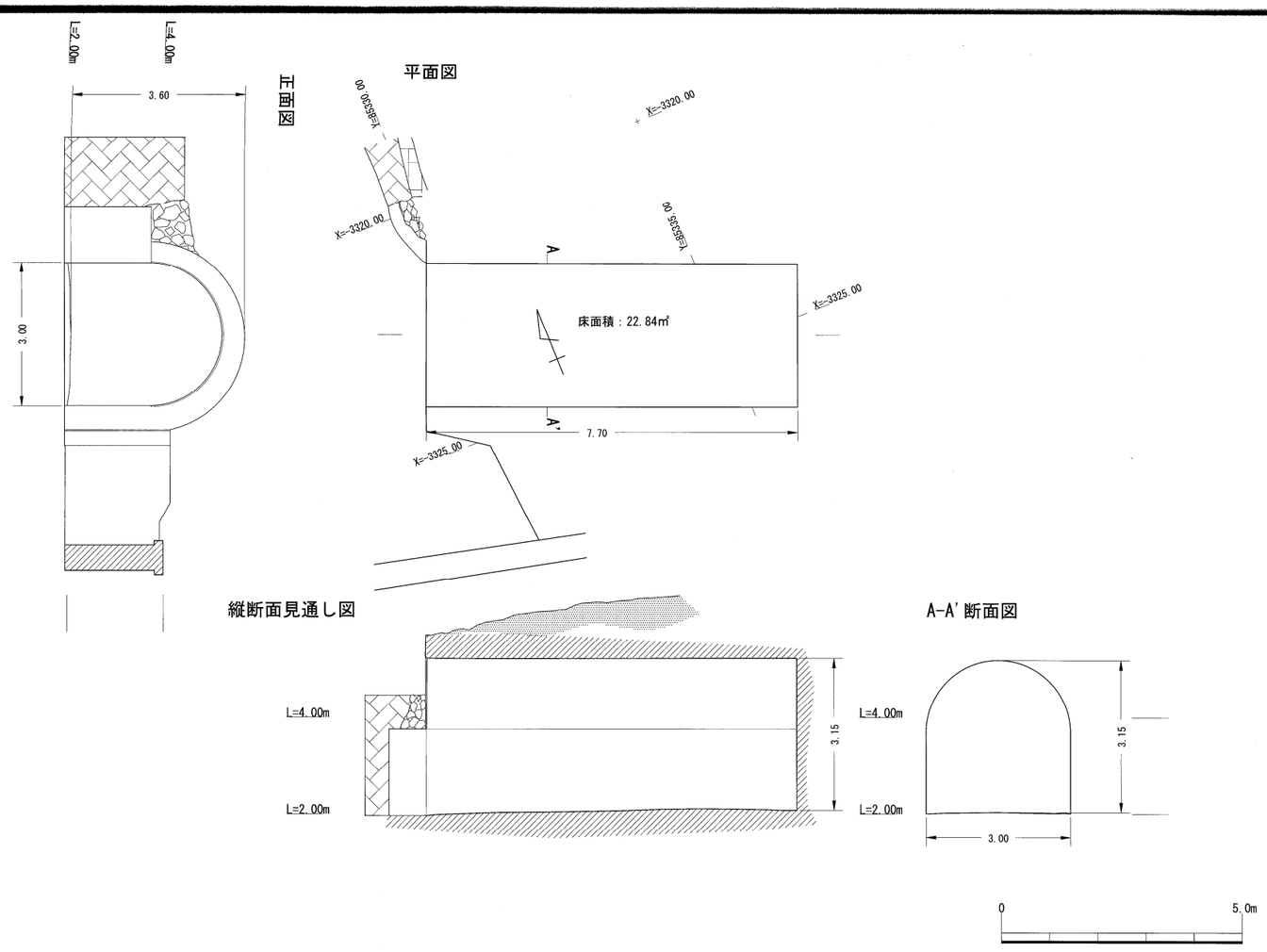
壁面厚
:幅 2.5
ルタル
いた後、
区間は
7.9 m、
こいる。
測のみ
た。同
間隔で
浸水も

3.0 m、
、床は
内壁に

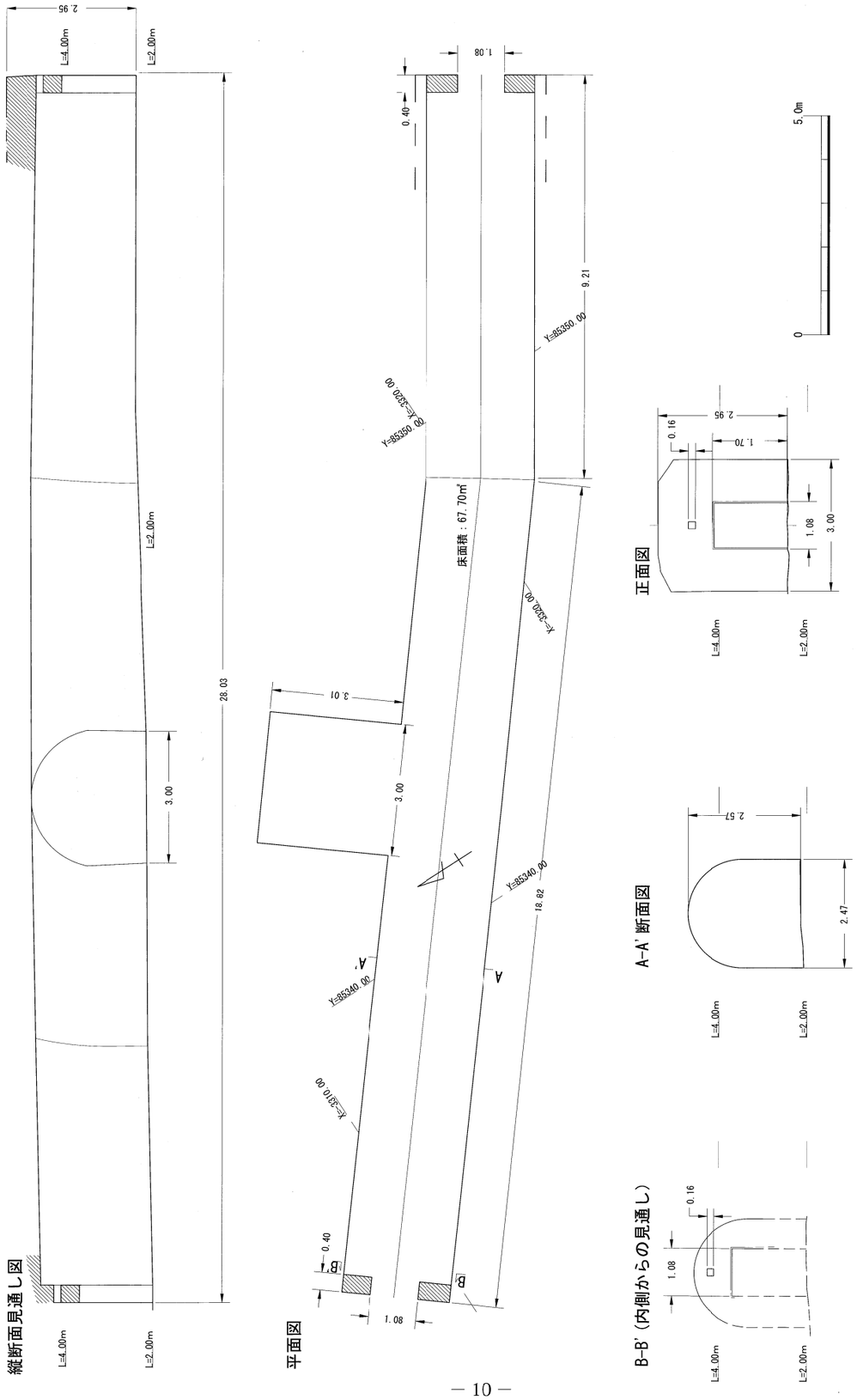
:取り、
鉄筋コ
り流入
没を除
によっ
の計測



第３図　濃霞山19-34遺構実測図（S=1/100・1/300）



第４図　濃霞山27遺構実測図（S=1/120）



第５図　濃霞山30遺構実測図（S=1/120）

２．長島山

概　要

長島山は佐伯市中江町に所在する南北に細長く伸びた急峻な山で、山頂は北部中央の標高 79.5 m地点、面積は 131000 ㎡を測り、地質は砂岩、泥岩より成る。当時は佐伯海軍航空隊と呉海軍軍需部佐伯支庁とが境界を接し、南端部を除くすべてが軍用地であったが、戦後は民有地となった。

山とその周辺に残る遺構を概観すると以下の通りである。山頂部は削平地にコンクリート造機銃台座４基、鉄筋コンクリート造建物１基、コンクリート造円形掩蔽物１基、南にやや下りコンクリート基礎を持つ建物跡１基、さらに主尾根伝いに進むと円形状窪地３基、境界標柱２基が確認できる。北東部中腹の削平地にはコンクリート造遺構群があり、他中腹一帯には円形状窪地３基、境界標柱３基が点在する。山麓には西側を除いて全体に遺構を確認でき、鉄筋コンクリート造建物２基、コンクリート巻立造地下壕 13 基、素掘の地下壕６基、隧道１基、井戸１基を数える。中でも東麓に並ぶ開口部に花崗岩アーチを持つ地下壕群は目を引くものである。これらの中で今回詳細に調査したものを報告していく。

長島山６

長島山北部東麓、標高 2.0 mに位置し、主軸をN－110°－Eにとる。総床面積 303.1 ㎡、全長 61.77 mのコンクリート巻立造地下壕で、内部が確認できた壕の中で最長最大のものである。開口部は花崗岩切石を放射状に配し、内寸幅 5.54 m、高さ 4.44 mのアーチを造り、壕内規模もその連続である。側部は鉄筋コンクリートを幅 8.2 m、高さ 6.15 mまで打設し、天端は花崗岩切石を配置している。開口部より 1.8 m入ると鉄骨鉄筋造の仕切り壁中央に鉄扉があり、両袖の壁面上方にはスレート管が２本、水平に配されている。壕内側壁は鉄筋コンクリート造、アーチ部分は 15 × 35cm のコンクリートブロック造である。床はコンクリートを水平に打設し、壁に沿って溝が廻り、鉄扉より約 30 mの所から奥に向かっては 14 基のコンクリート基礎が並ぶ。これらはその配置から７基１組で、本壕が燃料庫であったことと考え合わせると２基の油槽の土台と推察される。基礎は破壊されているが一番奥のものは残りがよく、油槽容量は各 71 ～ 82KL と推計できた。浸水はあるものの、亀裂など目立った破損個所はなく、保存状態は良好である。なお調査時鉄扉は開いた状態で固定されていたが、実測記述は閉じた状態を復元している。

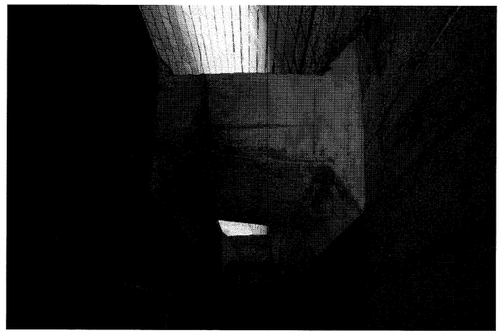
第６図　長島山６　コンクリート基礎残存状況

長島山８

長島山北部東麓の標高 2.15 mに位置し、主軸をN－110°－Eにとる。床面積は 160.17 ㎡、全長 31.77 mのコンクリート巻立造地下壕である。開口部は花崗岩切石を放射状に配し、内寸幅 5.55 m、高さ 4.48 mのアーチを造る。壕内も同じ規模で連続する。側部は鉄筋コンクリートを幅 8.12 m、高さ 6.12 mまで打設し、天端は花崗岩切石を笠石とする。開口部より 1.81 m入ると中央に鉄扉があり、両脇の鉄骨鉄筋造壕の壁面上方にはスレート管が出ている。壕内側壁はコンクリート造で、アーチ部分は 15 × 35cm のコンクリートブロック造、床面は水平にコンクリートが打たれ、壁に沿って溝を廻らせている。鉄扉より 5.1 m入った床面に、溝を刻んだ長方形の鉄板が４枚ボルトで固定されていたが、当時のものか不明である。遺構の現状は浸水、亀裂など目立った破損箇所はなく良好な保存状態である。

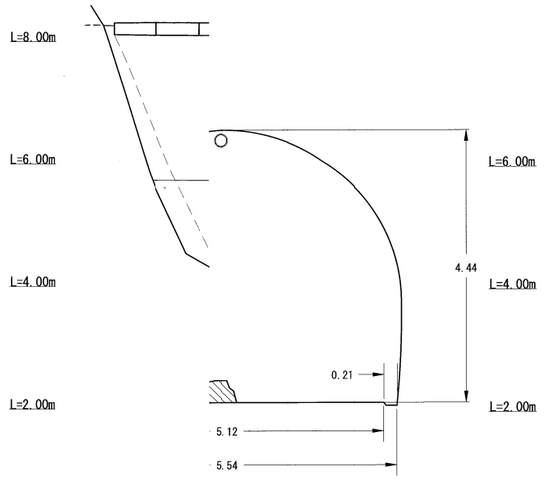
長島山 11

長島山中部東麓、標高 2.0 mに位置し、主軸をN－109°－Eにとる。総床面積 76.72 ㎡、全長 17.6 mのコンクリート巻立造地下壕である。開口部は花崗岩切石を放射状に配し、内寸幅 7.3 m、高さ 5.81 mのアーチを造る。開口部右袖内側には被弾痕が３箇所確認できる。正面構造、意匠的には長島山６、８と同じであるが、より開口部を広く確保した型である。入口は 14.5 × 30cm のコンクリートブロックを積み上げた外壁で閉塞されているが、中央の鉄扉及び左右の板扉を通って中に入ることができる。内部は側壁をコンクリート、アーチ部を 15 × 30cm のコンクリートブロックで巻立後、さらに内側にコンクリートを巻立てて壕を設ける二重構造となっている。外側の壕と内側の壕の間隔は 60cm で、通路状に内側壕の周囲を巡る。両者はコンクリート製飛梁[1]により支えられ、飛梁は左右各５箇所、側壁床面から 2.0 mの高さで等間隔に配されている。中央扉を入ると内側の壕の前室（5.5 m× 2.5 m）があり、奥の仕切りを抜けると 5.5 × 11.45 mの空間がある。内側壕の壁と床は板張りの痕跡を残しており、内部側面木材は復元し図化した。ただし現状では床板は完全に失われ、壁の板材も剥落した部分が目立つ。遺構の状態は、正面中央天端より亀裂が垂直に走っている以外は、浸水、目立った破損箇所等はなく良好な状態である。

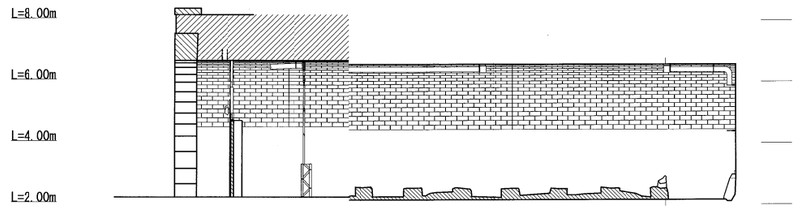


第７図　長島山 11 コンクリート製飛梁配置状況

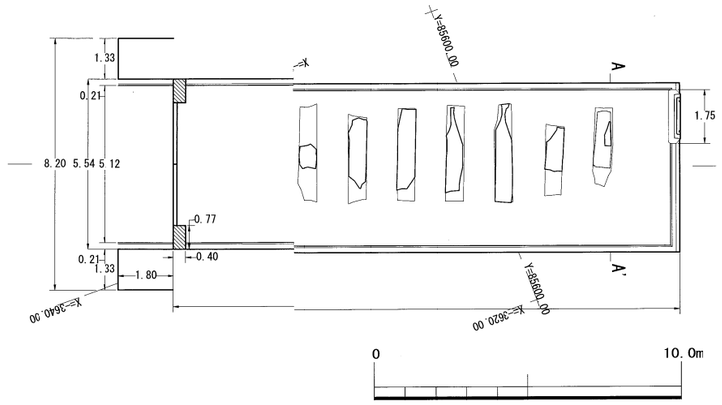
側面図 S=1/100



縦断面見通し図 1/200



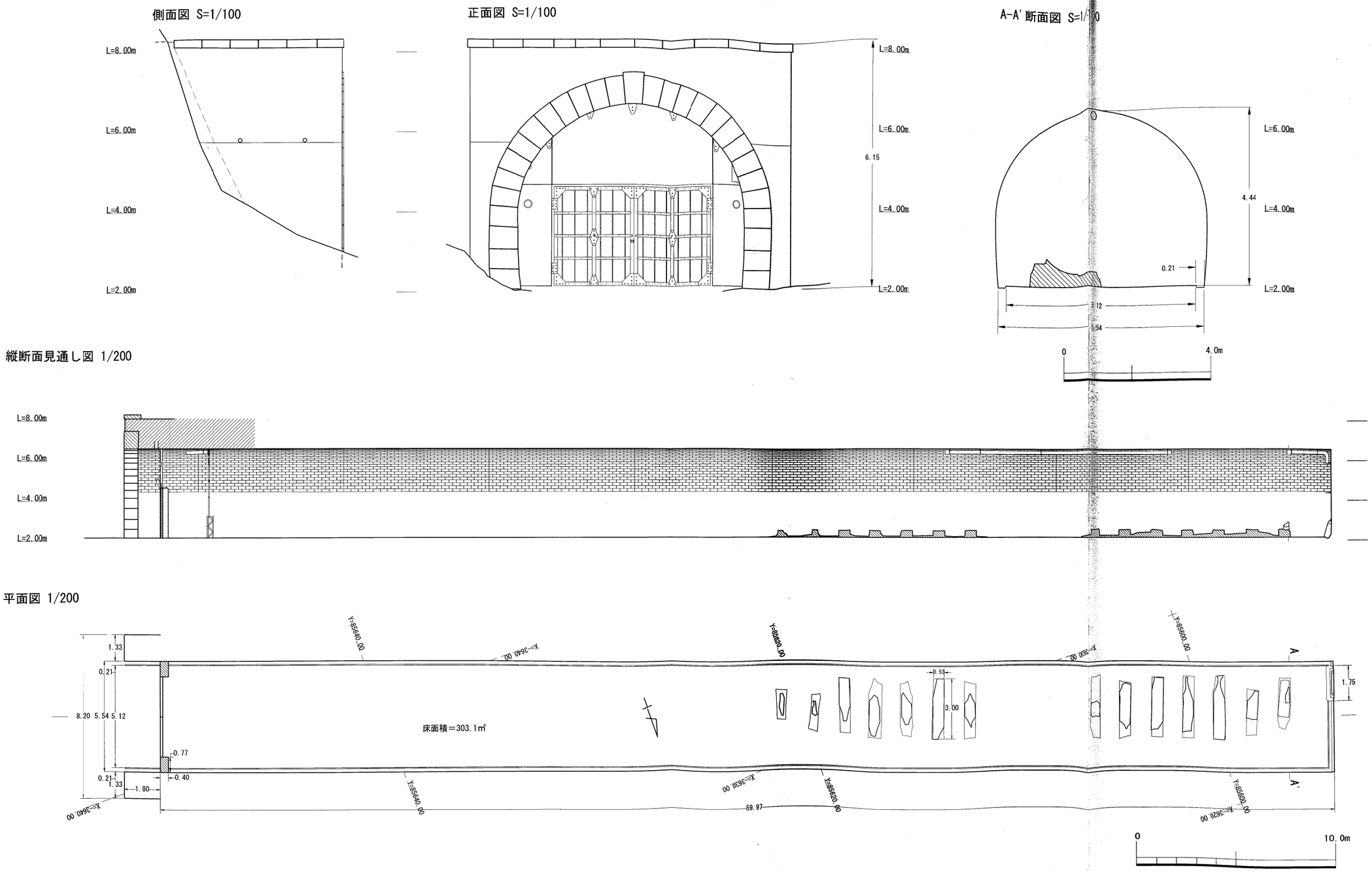
平面図 1/200



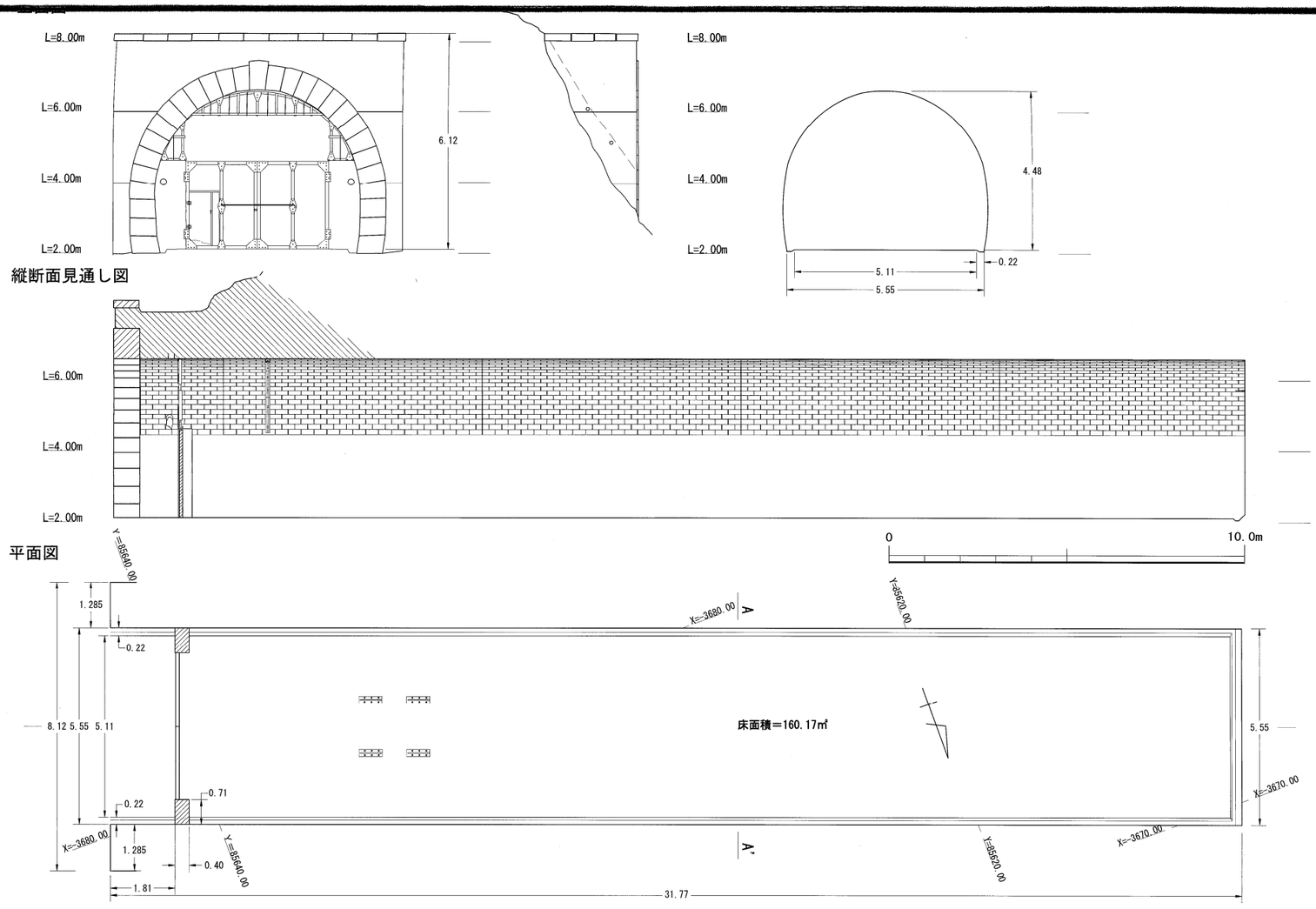
.17 ㎡、全長
寸幅 5.55 m、
幅 8.12 m、高
に鉄扉があり、
、アーチ部分
って溝を廻ら
されていたが、
浮状態である。

配置状況

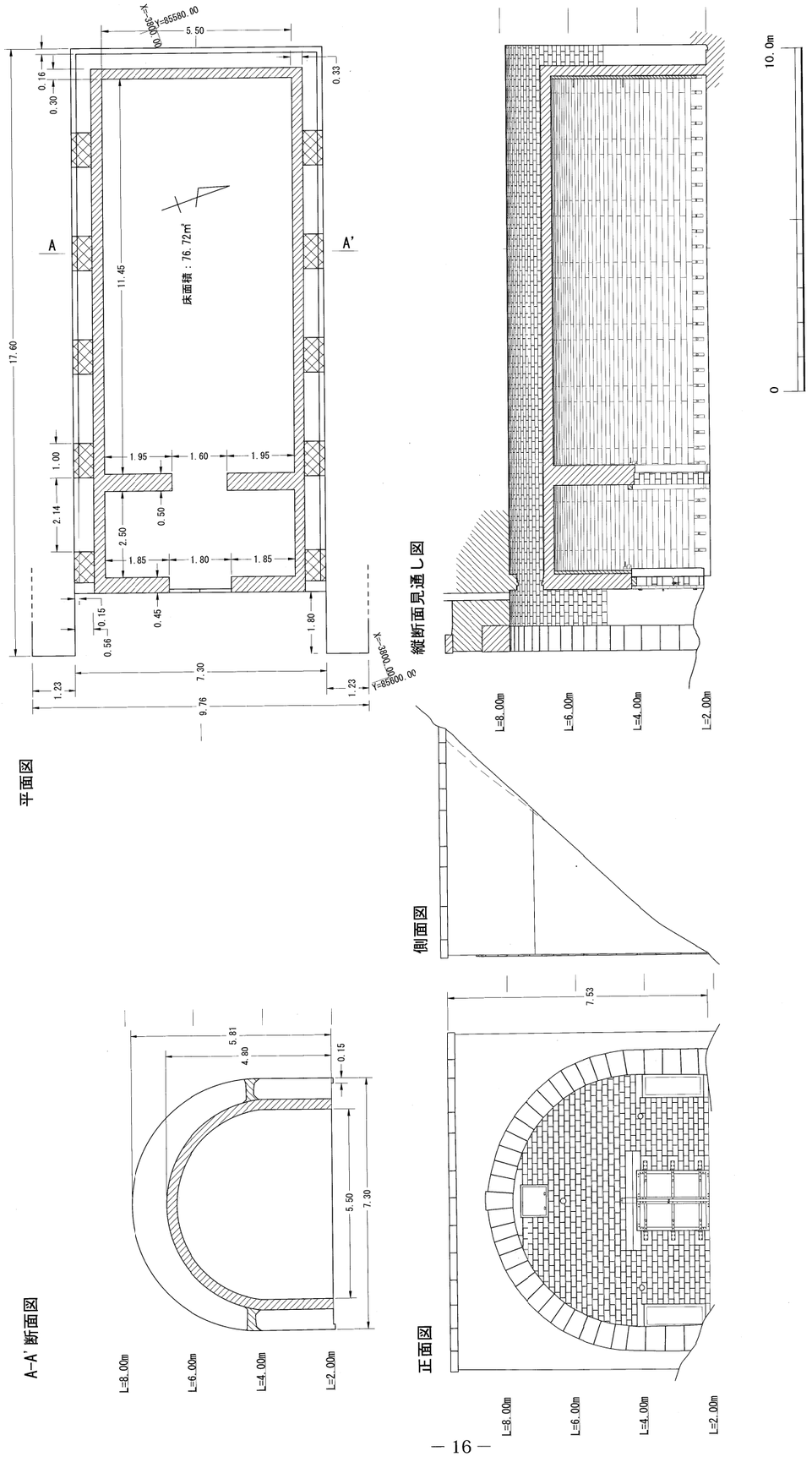
クリート、アー
てて壕を設け
囲を巡る。両
の高さで等間
りを抜けると
材は復元し図
状態は、正面
態である。



第８図　長島山６遺構実測図（S=1/200・1/100）



第９図　長島山８遺構実測図（S=1/150）



第10図　長島山11遺構実測図（S=1/150）

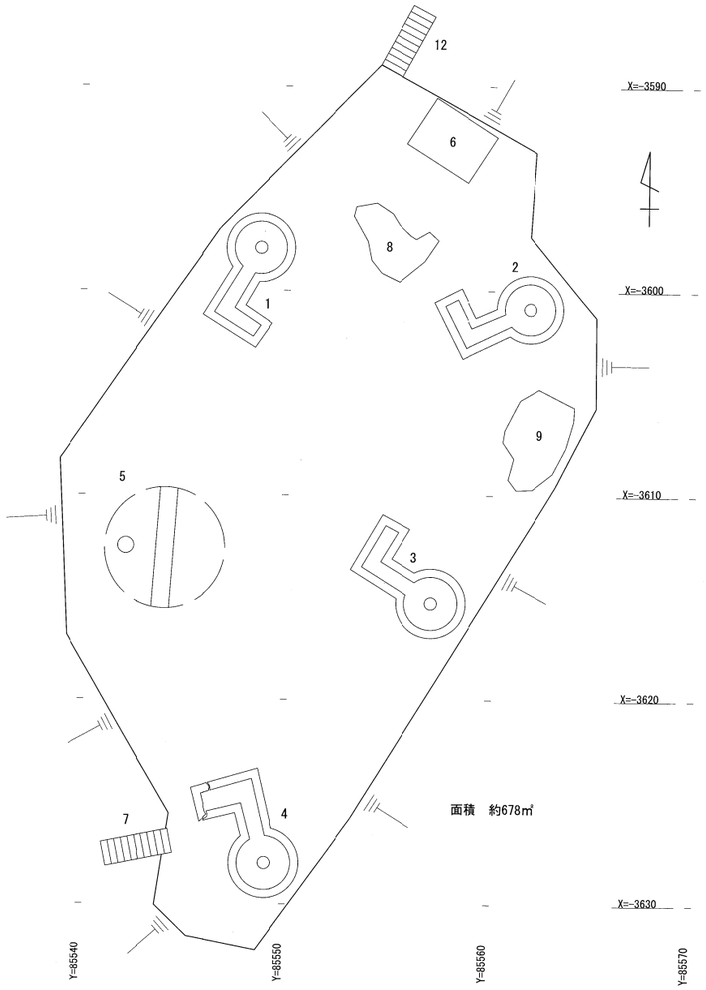
長島山 26

概　要

長島山北部の山頂削平地標高 79.5 mと、そこより南東へ 50 mほど下った削平地標高 72.5 mに展開するコンクリート構造物を主体とした遺構群。以下北と南に分けて報告する。

長島山 26 北

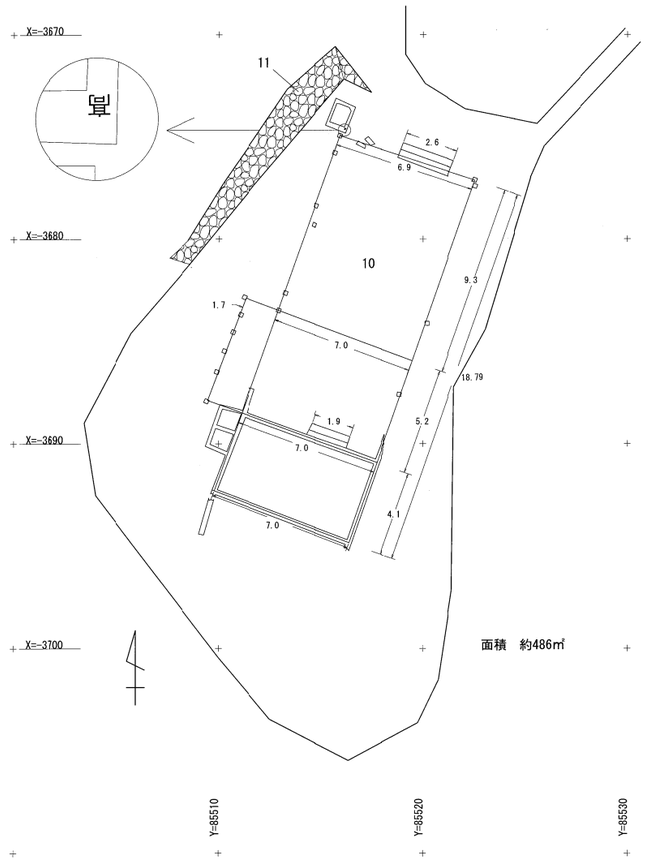
面積は 678 ㎡である（第11図）。1～4はコンクリート造の台座で、円形部分は直径 2.6m 深さ 1.2m、側壁には幅 37 × 高さ 60 × 奥行 21cm の方形の孔が等間隔に 3 箇所設けられている。床面中心の設置部は直径 60cm、深さ 27cm で、それを径 15mm のボルト 8 本が等間隔に囲む。ボルトは直径 95cm の円周上に配置され、高さ 5 cm ほどが残存する。5は平面形状は正円で中心に向かい 80cm 高くなっており、その天蓋下に約 2.0 × 2.0 × 2.0 mのコンクリート造の空間を持つ。6は鉄筋コンクリート造建物、7、12はコンクリート造階段である。8、9は塹壕状遺構であるが、底部形状が定かではなく本遺跡に伴うものか不明である。



第11図　長島山26北遺構配置図（S=1/300）

長島山 26 南

平地面積は 486 ㎡で、木々が茂っている(第 12 図)。10 はコンクリート基礎建物で、基礎が原位置を保っているため間取りが復元できる。北の階段が正面入口で、中は 3 部屋が縦に並び、一番奥の部屋は布基礎状にコンクリートが打たれている。建物北西隅角外にはコンクリートの水槽があり、縁平面のモルタル整形時に 9 cm 大の「高」の文字が刻まれている。また周囲に広範囲にわたり散らばる多量のコンクリート壁、スレート板材、板ガラス等も当時の建築部材とみられる。11 は砂岩を主体とした石組で露出する部分だけを確認し図化したが、削平地周囲にも部分的に見ることができる。

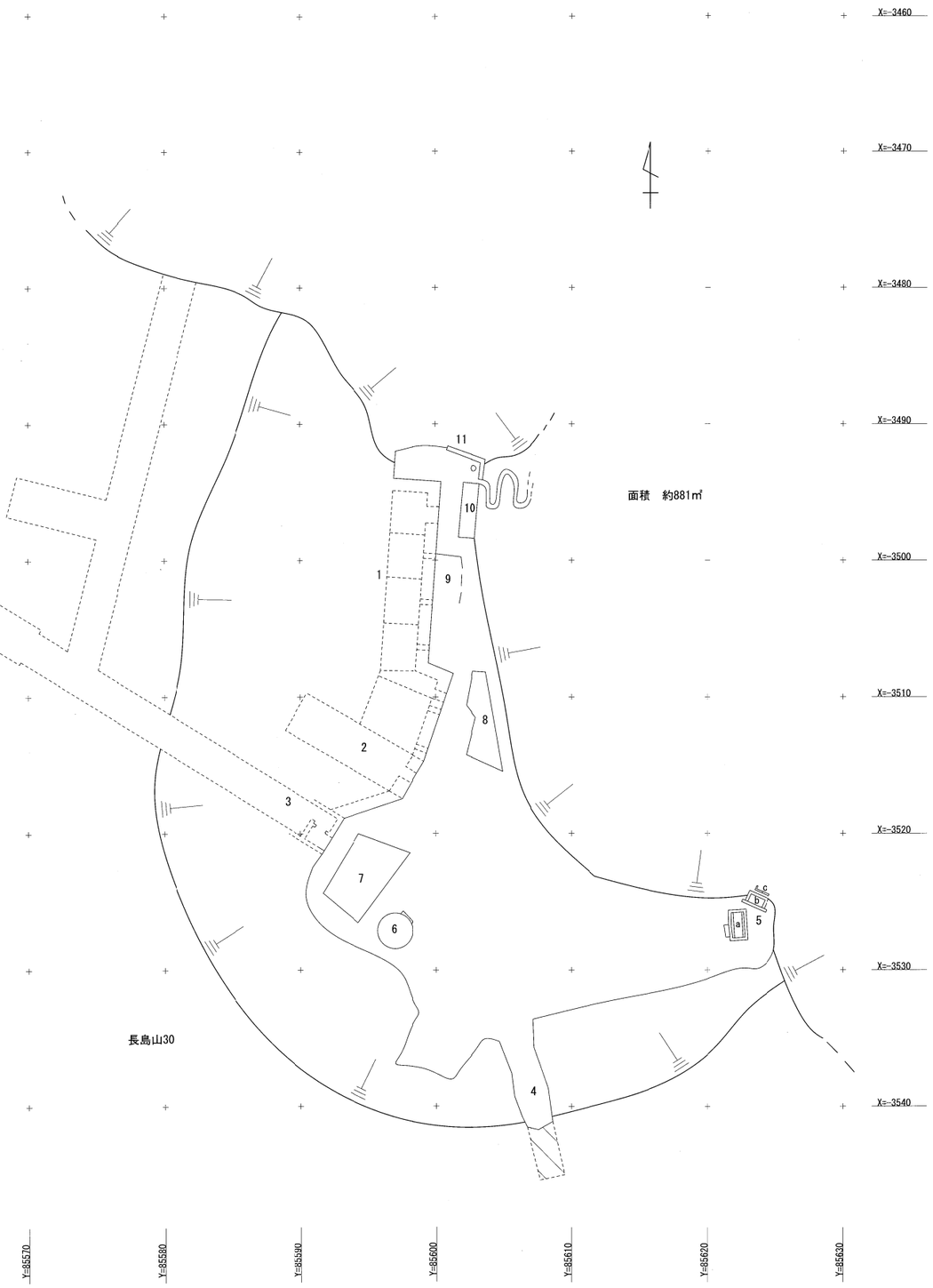


第12図　長島山26南遺構配置図（S=1/300）

長島山 30

概　要

海上自衛隊佐伯分遣隊庁舎の裏、長島山北東中腹の尾根に挟まれた谷斜面を削平した平坦部面積 881 ㎡、標高 20 ～ 21 mに立地する遺構群である（第 13 図）。1 は鉄筋コンクリート造掩蔽下に 4 部屋（16 ㎡）が並び、各々にのぞき窓を一つずつ持つ。さらに壁を隔てもう一つ部屋が連なる。いずれも内部はモルタル仕上げで、外壁は 1.2 mと分厚い。2 、3 は鉄筋コンクリート造巻立壕、4 は素掘の壕、5 はコンクリート枡、6 は地下壕の換気塔、7 ～ 11 はコンクリート造障壁で、11 の角内には鉄筋コンクリート造の直径 20cm、高さ 1.0 mの円柱がある。この中で詳細に調査した 3 を以下に報告する。



第13図　長島山30遺構配置図（S=1/400）

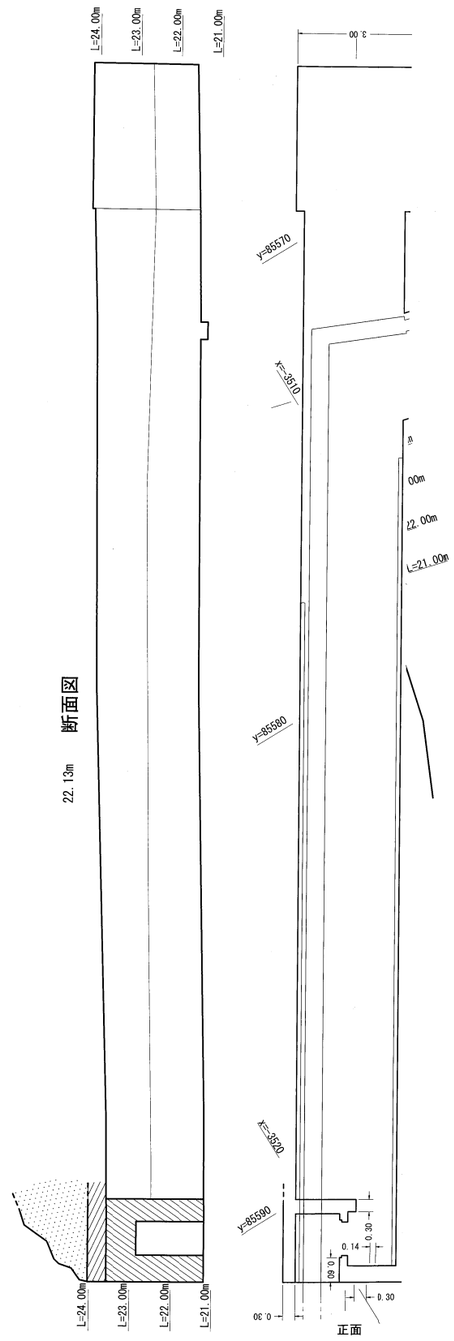
長島山 30 － 3

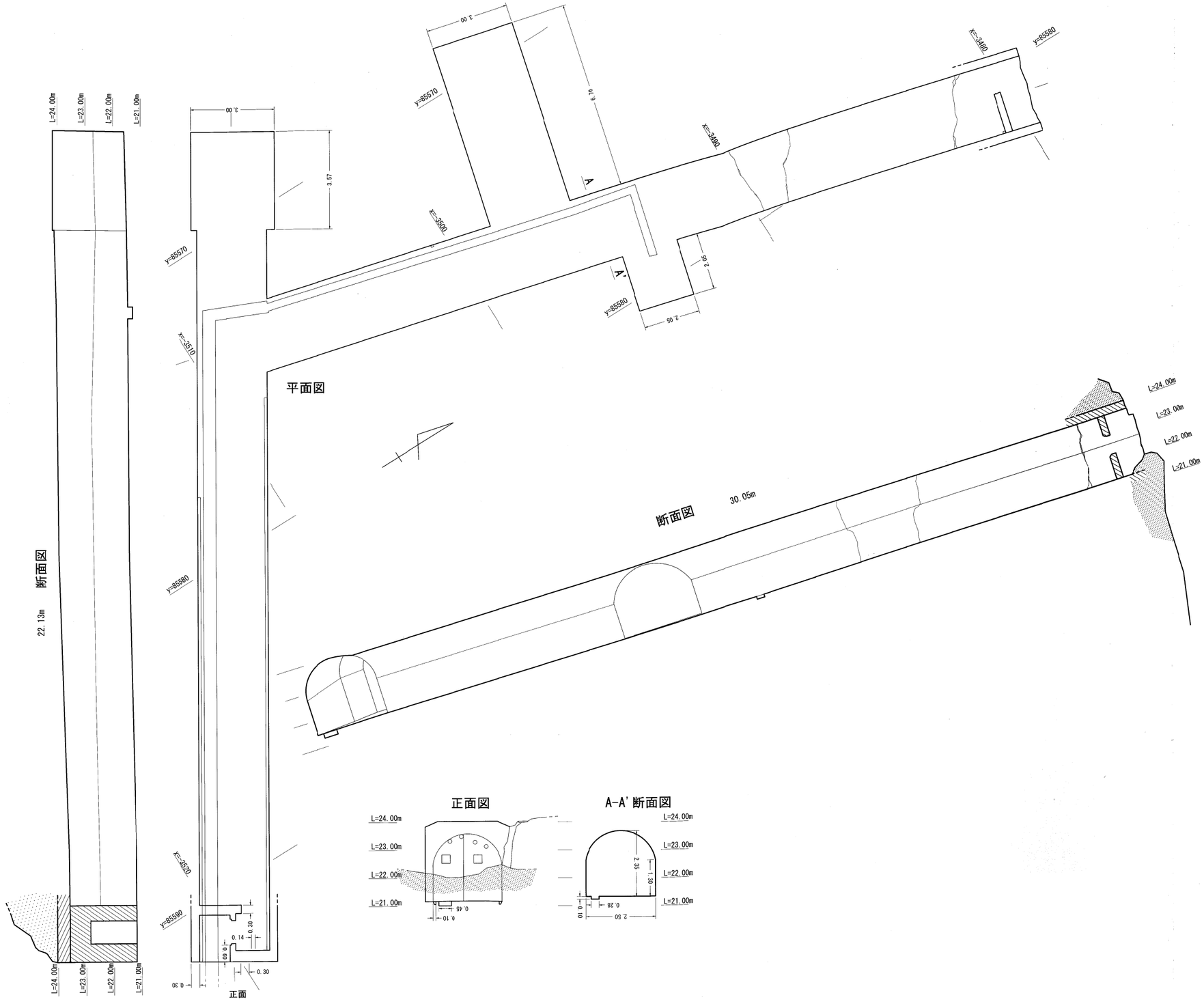
長島山北東中腹の削平地長島山 30 の中ほど、標高 21.15 mの地点に位置する。主軸を N－122°－E にとり、総床面積 173.27 ㎡、全長 52.18 mの鉄筋コンクリート巻立造地下壕で、平面形状はやや開きぎみのＬ字形を呈する。開口部は多量の土砂に半ばまで埋まっていた。入口には厚さ 30cmのコンクリート造障壁が２対あり、各々の上部に 30cm 角の方形窓１箇所と直径 14cm の円形孔２箇所を持つ。壕内を進むと 23.25 m進んだところで右に 72° 折れ、さらに 30.05 mで絶壁にある反対側の開口部に至る。破損した障壁が１枚残存するが、90cm 先で壕が断絶しているため、もう１枚の障壁は崖下に崩落したのか、施工途中で終わっているのか不明である。壕の横壁には３つの部屋が造られており、各々 3.0 × 3.57 m、3.0 × 6.76 m、2.05 × 2.05 mの方形を呈する。

壕の床面幅は 2.5 mで、３条の溝をもつ。両端の溝は幅、深さとも 10cm で、奥に行くほど浅くなるので排水溝と考えられる。内側の溝は全長 41.7 m、深さは 10cm で一定であるが、幅は 45cm から途中角を曲がると 28cm に変わる。この溝は高低差がなく最初の横部屋を過ぎた地点で細くなっていることから、配線を各部屋に分配するためのものと推測した。開口部から出て長島山 30 － 6 換気塔竪坑内へ繋がっているようである。

註１　別名フライングバットレス、飛控えとも言う。ゴシックの教会堂建築において筒型壁の側圧を外側の支柱、壁に伝えるため渡された石のアーチ。ここでは外壁から内壁に渡された梁の名称として使用している。

【参考文献】 株式会社彰国社 『建築大辞典』第２版　1993





第14図　長島山30-3遺構実測図（S=1/150）

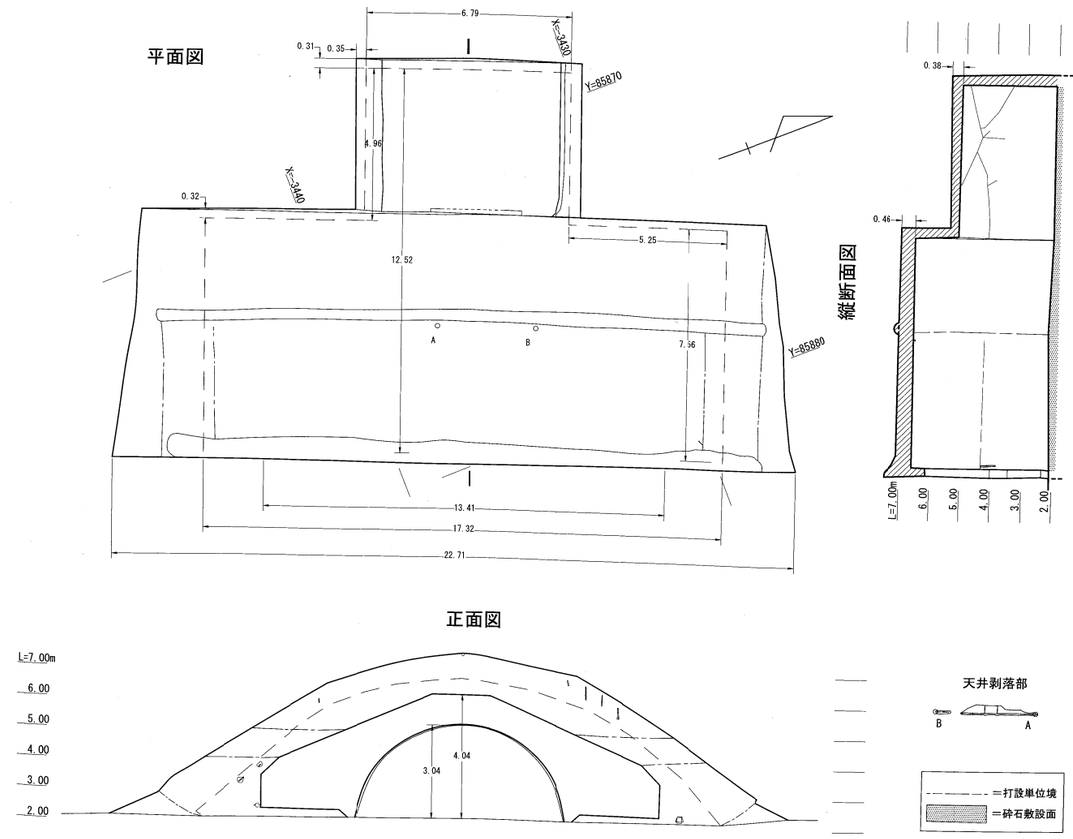
3. 興人

概　説

佐伯市東浜に所在する埋立地で、標高は 2.0 m、佐伯海軍航空隊飛行場跡地の北半を占める。現在も航空隊関連の遺構は残っており、主なものとして国の登録有形文化財に指定されている掩体壕 1 基のほか、鉄筋コンクリート造建物 1 基、掩体壕 2 基等が確認できた。

興人 1

鉄筋鉄網コンクリート木製枠造掩体壕で、滑走路に平行に配置されている。開口部は幅 17.32 m、高さ 4.04 m、主翼格納部は幅 17.32 m、高さ 4.5 m、尾翼格納部は幅 6.79 m、高さ 3.0 m、各部合わせた奥行きは 12.52 m、天蓋壁厚さ 50cm を測る。遺構底部は砕石を敷設しており実際の位置、状態は確認できなかった。



第15図　興人1遺構実測図（S=1/200）

第１表　遺構台帳

濃霞山

番号	種別	構造	幅m	高さm	延長、奥行m	旧所管	旧施設名	掲載図	備考
1	地下壕	コンクリート巻立	5.5(8.0)	4.5(6.0)	20.0	佐伯海軍航空隊	木工場	1/2500	
2	地下壕	コンクリート巻立・素掘	2.0 (2.6)	〈1.5 (1.8) 〉	〈20.0〉	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
3	地下壕	コンクリート巻立	2.5	－	－	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
4	地下壕	素掘	5.0	－	－	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
5	建物	コンクリート	15.5	6.5	6.0	佐伯防備隊	弾薬庫	1/2500	
6	地下壕	コンクリート巻立	1.0 (2.6)	1.7 (2.0)	〈20.0〉	佐伯防備隊	－	1/2500	
7	地下壕	コンクリート巻立.開口部石組	1.8 (3.0)	1.3 (1.8)	〈5.0〉	佐伯防備隊	－	1/2500	前庭部に高さ1.6mの障壁が半壊状態で残存
8	地下壕	コンクリート巻立	2.2 (3.8)	2.05 (3.0)	〈19.45〉	佐伯防備隊	－	1/120.1/2500	
9	配水管	スレート管（石綿セメント管）	φ0.25	－	〈85.0〉	－	－	1/2500	
10	地下壕	コンクリート巻立・素掘	2.0 (2.4)	〈1.5 (1.6) 〉	〈4.0〉	佐伯防備隊	配電所	1/2500	造りが似ている
11	地下壕	コンクリート巻立	1.9 (2.5)	〈1.6 (1.2) 〉	6.0	佐伯防備隊	工業所	1/2500	
12	地下壕	コンクリート巻立	0.9 (1.8)	〈0.6 (0.8) 〉	〈5.0〉	佐伯防備隊	－	1/2500	開口部2枚障壁
13	地下壕	コンクリート巻立	〈 (5.0) 〉	〈 (3.0) 〉	〈1.5〉	佐伯防備隊	工業部	1/2500	法面石積モルタル造標識有
14	地下壕	コンクリート巻立	〈 (5.0) 〉	〈 (3.0) 〉	〈1.5〉	佐伯防備隊	内務科特務部	1/2500	法面石積モルタル造標識有
15	地下壕	コンクリート巻立	〈 (5.0) 〉	〈 (2.5) 〉	〈1.0〉	佐伯防備隊	砲術科	1/2500	法面石積モルタル造標識有
16	地下壕	－	(6.0)	(3.0)	－	佐伯防備隊	掃海部	1/2500	法面石積モルタル造標識有
17	地下壕	－	(6.0)	(3.0)	－	佐伯防備隊	測圏部防空壕	1/2500	法面石積モルタル造標識有
18	建物	鉄筋コンクリート	14.0	5.0	9.0	佐伯防備隊	防空指揮所	1/2500	標識は1990年頃までは存在していた
19・34	地下壕	コンクリート巻立・一部素掘	2.5	2.45	98.50	佐伯防備隊	受信所	1/300.1/2500	
20・21・38	地下壕	素掘	3.5	〈5.0〉	19.0	佐伯防備隊	－	1/2500	
21・20・38	地下壕	素掘	2.6	〈4.7〉	24.0	佐伯防備隊	－	1/2500	
22	水槽	コンクリート	3.0	1.5	1.8	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
23	建物	コンクリート	(3.0)	〈 (2.6) 〉	3.7	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
24	建物	コンクリート	(3.0)	〈 (1.2) 〉	〈1.0〉	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
25・31・32	－	－	－	－	－	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	コンクリート一部露出
26・30	－	－	－	－	－	佐伯海軍航空隊	送信所	1/2500	コンクリート一部露出
27	地下壕	コンクリート巻立	3.0 (4.0)	3.15 (3.75)	7.70	佐伯海軍航空隊	－	1/120.1/2500	
28	門	コンクリート	3.0	1.55	－	佐伯海軍航空隊	病舎通用門	1/2500	一対
29	門	コンクリート、レンガ調タイル	0.6	1.8	0.6	佐伯海軍航空隊	正門	1/2500	一対
30・26	地下壕	コンクリート巻立	1.1 (3.0)	1.7 (2.95)	28.0	佐伯海軍航空隊	送信所	1/120.1/2500	
31・32・25	地下壕	コンクリート巻立	(3.5)	(3.0)	35.0	佐伯海軍航空隊	金工場	1/2500	
32・31・25	地下壕	素掘り・一部コンクリート巻立	(2.8)	(2.5)	30.0	佐伯海軍航空隊	発動機室	1/2500	
33	地下壕	素掘り・一部コンクリート巻立	2.2	2.0	10	佐伯海軍航空隊	金工場	1/2500	証言「以前は工と繋がっていた　通信機が入っていた」
34・19	地下壕	コンクリート巻立・一部素掘り	2.5 (3.7)	2.3 (3.25)	98.5	佐伯防備隊	受信所	1/300.1/2500	
35	壁	コンクリート	2.5	0.8	0.3	－	－	1/2500	障壁？
36	遺構群	コンクリート等	－	－	－	－	配水地	1/2500	濃霞山山頂水槽・建物等
37	壁	コンクリート	3.0	1.2	－	佐伯防備隊	－	1/2500	
38・21・20	地下壕	コンクリート巻立	－	－	15.0	佐伯防備隊	－	1/2500	内部は施工精度が良
39	トーチカ	コンクリート	6.1	4.0	4.7	－	－	1/2500	
40	建物	コンクリート	5.0	5.0	5.0	佐伯海軍航空隊	衛兵詰所	1/2500	現在住宅と一体になっている
41	管	鉄	－	－	－	－	配水管	1/2500	
42・43	地下壕	素掘	3.0	－	21.0	－	－	1/2500	石組の障壁らしきもの開口部にL字に取り付く
43・42	地下壕	素掘	2.5	1.5	21.0	－	－	1/2500	前庭部にコンクリート塊礫散乱している
44	円形窪地	－	φ4.4	-1.5	－	－	－	1/2500	爆弾炸裂痕
45	円形窪地	－	φ6.2	-1.0	－	－	－	1/2500	爆弾炸裂痕

長島山

番号	種別	構造	幅m	高さm	延長、奥行m	旧所管	旧施設名	掲載図	備考
1	井戸	凝灰岩切石（井桁部）	2.1 (3.5)	〈-2.0〉	－	佐伯海軍航空隊	井戸	1/2500	
2	地下壕	コンクリート巻立	3.0 (3.8)	〈2.8 (3.2) 〉	〈6.4〉	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
3	地下壕	コンクリート巻立	2.5 (3.6)	〈2.0 (2.6) 〉	〈10.0〉	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
4	建物	コンクリート	4.4	3.4	7	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
5	建物	コンクリート	4.5	3.5	7.1	佐伯海軍航空隊	喞筒室	1/2500	給油関連施設
6	地下壕	コンクリート巻立	5.55(8.15)	4.45(6.15)	61.80	佐伯海軍航空隊	第二燃料庫	1/200.1/2500	
7	地下壕	コンクリート巻立	5.7 (8.0)	〈4.0 (5.8) 〉	〈20.0〉	佐伯海軍航空隊	第一燃料庫	1/2500	
8	地下壕	コンクリート巻立	5.55 (8.12)	4.5 (6.12)	31.80	佐伯海軍航空隊	潤滑油庫	1/150.1/2500	
9	地下壕	コンクリート巻立	7.2 (9.6)	5.5 (7.4)	－	佐伯海軍航空隊	実爆弾庫	1/2500	障壁あり 9.55×2.4×3.5m
10	地下壕	コンクリート巻立	8	5.9	－	佐伯海軍航空隊	演習弾庫	1/2500	
11	地下壕	コンクリート巻立	5.50 (9.75)	5.80 (7.55)	17.60	佐伯海軍航空隊	火工品庫	1/150.1/2500	
12	地下壕	－	－	－	－	－	－	1/2500	H16年の大雨による土砂崩れで埋没のため位置推定
13・16	隧道	素掘	4.3	2	〈5.0〉	－	－	1/2500	水が溜まっているが通り抜け可能
14	地下壕	素掘	2.4	2.2	9	－	－	1/2500	
15	掩蔽壕	コンクリート巻立	5.9	3.5	7.4	－	－	1/2500	保養院建物の一つにに内包されている
16・13	隧道	素掘	3.6	4	〈20.0〉	－	－	1/2500	13につながる
17	地下壕	コンクリート巻立	5.55 (7.1)	3.7 (5.2)	〈7.5〉	呉海軍軍需部	信管庫	1/2500	障壁あり　8×4.5×1.1mが住居と一体化し壁となっている
18	地下壕	－	－	－	－	－	火薬庫	1/2500	埋められているが所有者の方に大体の場所を聞いた 佐伯で当時最大の地下壕
19	地下壕	コンクリート巻立	〈2.1 (3.0) 〉	〈1.0 (1.8) 〉	－	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	埋没している
20	地下壕	コンクリート巻立	〈2.0 (3.0) 〉	〈0.8 (1.1) 〉	〈5.0〉	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	21とつながる可能性有
21	地下壕	素掘	〈2.6〉	〈0.9〉	〈5.0〉	－	－	1/2500	20とつながる可能性有
22	地下壕	素掘	〈3.1〉	〈3.0〉	〈5.0〉	－	－	1/2500	
23	地下壕	素掘	〈2.3〉	〈1.1〉	－	－	－	1/2500	ほとんど埋没している
24	地下壕	素掘	〈0.7〉	〈2.0〉	－	－	－	1/2500	ほとんど埋没している
25	地下壕	素掘	〈2.1〉	〈1.7〉	－	－	－	1/2500	ほとんど埋没している
26	長島山山頂削平地に所在する、機銃台座4基、観測所2、兵舎１からなる遺構群。※計測値の入ってないものは第11・12図参照								
26-1	機銃台座	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	
26-2	機銃台座	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	
26-3	機銃台座	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	
26-4	機銃台座	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	
26-5	観測所	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	
26-6	観測所	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	
26-7	階段	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	戦後に付けられたものか他の部材を転用している
26-8	塹壕状	素掘	－	－	－	－	－	1/300	
26-9	塹壕状	素掘	－	－	－	－	－	1/300	
26-10	建物	コンクリート基礎建物	－	－	－	－	－	1/300	水槽の縁に高の字が刻まれている
26-11	石組み	砂岩	－	－	－	－	－	1/300	露出しているところだけ図化した
26-12	階段	コンクリート	－	－	－	－	－	1/300	残り悪い
27	境界柱	コンクリート	0.2	0.2	0.7	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	民家にもう1本有。計3本
28	方形窪地	－	5.0	2.0	7.0	－	－	1/2500	地下壕掘削途中か
29	境界柱	花崗岩	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	※109	1/2500	

番号	種別	構造	幅m	高さm	延長、奥行m	旧所管	旧施設名	掲載図	備考
30	長島山北東中腹主尾根に挟まれた削平地に所在する、地下壕3. 障壁5. 建物1. 堅坑1. 水槽3基からなる遺構群。※計測値の入っていないものは第13図参照								
30-1	掩蔽室	コンクリート	－	－	－	佐伯海軍航空隊	戦闘指揮所	1/400	外壁は1.2mと厚い 4部屋横に繋がっている
30-2	掩蔽室	コンクリート	0.9（2.0）	1.35（2.0）	10.0	佐伯海軍航空隊	戦闘指揮所	1/400	
30-3	地下壕	コンクリート巻立	－	－	－	佐伯海軍航空隊	受信所	1/150. 1/400	入り口に礫土多量にかぶり中に入り辛い
30-4	地下壕	素掘	〈2.75〉	〈1.45〉	11.5	－	－	1/400	崩壊の状況から当時の開口部は、5mほど手前と考えられる
30-5	水槽	コンクリート	a　2.3×1.3	b　1.0×1.6	c　1.2×0.3	佐伯海軍航空隊	－	1/400	トイレか
30-6	換気口	コンクリート	φ2.0（2.6）	5.0	－	佐伯海軍航空隊	第三燃料庫	1/400	鉄製フードは半壊状態
30-7	障壁	コンクリート	6.3	4.2	2.3	佐伯海軍航空隊	－	1/400	
30-8	障壁	コンクリート、内に礫充填	8.1	1.6	2.6	佐伯海軍航空隊	－	1/400	礫充填途中か内部半空洞
30-9	障壁	コンクリート、内に礫充填	0.9	0.6	2.0	佐伯海軍航空隊	－	1/400	
30-10	障壁	コンクリート、内に礫充填	4.3	2.0	1.6	佐伯海軍航空隊	－	1/400	
30-11	障壁	コンクリート	1.90-3.05	0.85	0.3	佐伯海軍航空隊	－	1/400	直径0.2、高さ1mのコンクリート柱あり
31	円形窪地	－	φ9.5	-3.0	－	－	－	1/2500	
32	円形窪地	－	φ15.0	-3.0	－	－	－	1/2500	
33	円形窪地	－	φ7.0	-2.0	－	－	－	1/2500	
34	円形窪地	－	φ8.0	-2.0	－	－	－	1/2500	
35	円形窪地	－	φ5.5	-1.5	－	－	－	1/2500	
36	境界柱	コンクリート	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	※	1/2500	№なし
37	境界柱	花崗岩	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	※115	1/2500	
38	境界柱	花崗岩	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	※114	1/2500	
39	境界柱	花崗岩	0.15	0.26	0.15	佐伯海軍航空隊	※113	1/2500	
40	柵基礎	コンクリート	0.5	0.5	－	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	航空隊の境界に沿って等間隔に設置されている

※φ直径

興人

番号	種別	構造	幅m	高さm	延長、奥行m	旧所管	旧施設名	掲載図	備考
1	掩体壕	コンクリート	(22.7)	(13.0)	(5.4)	佐伯海軍航空隊	－	1/200. 1/2500	
2	掩体壕	コンクリート	(22.0)	(13.0)	(5.4)	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	
3	掩体壕	石組は天蓋コンクリート	1.5（2.0）	(5.0)	(2.0)	佐伯海軍航空隊	－	1/2500	開口部半壊
4	建物	鉄筋コンクリート	(15.0-8.5)	(8.8-16.0)	－	佐伯海軍航空隊	指揮所	1/2500	

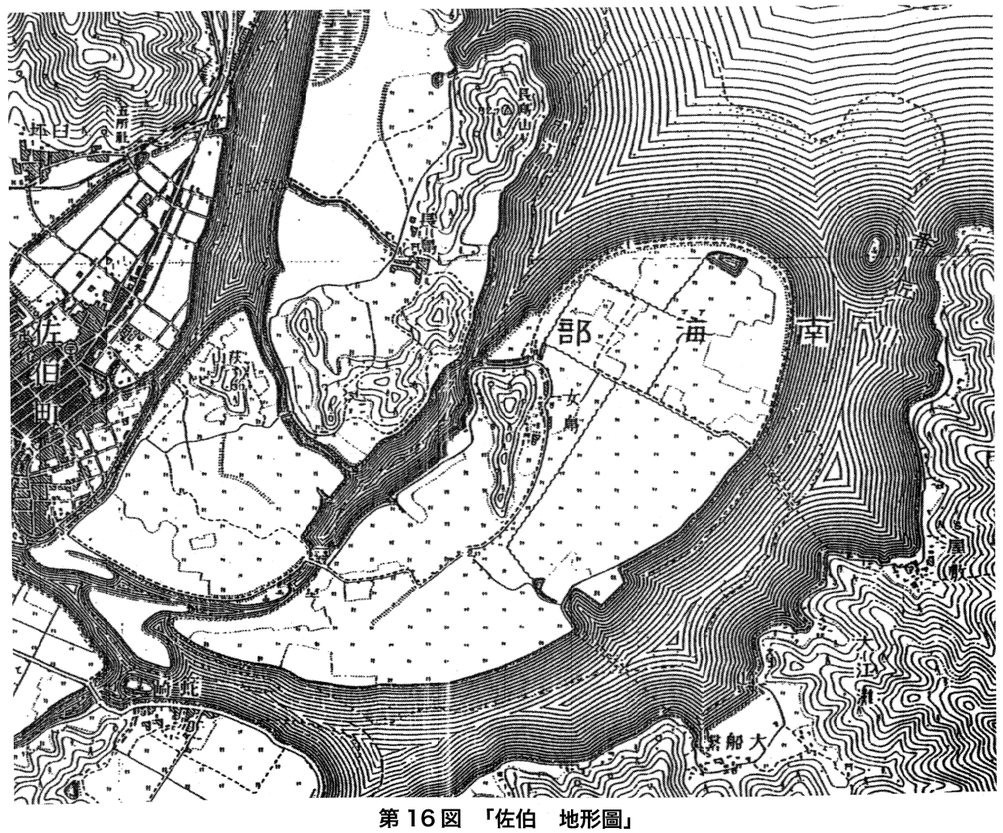
	遺構数
濃霧山	45
長島山	61
興人	4
合計	110

第Ⅳ章　史料調査

1. 今回の史料調査は現地踏査によって確認できた遺構の分布位置や構造に施設名、成立時期を付加するべく、県南歴史資産開発推進市民会議発行の『追体験佐伯と海軍』、『佐伯海軍航空隊兵舎保存を求める声－昭和メモリアルパークへのいざない－』、福西正道氏所蔵の佐伯海軍関係史料を始めとし、防衛庁防衛研究所図書館、国立国会図書館憲政資料室米国戦略爆撃調査団資料（ＵＳＳＢＳ）[1] 等の資料を調査した。以下主要な史料を掲載し解説を加えていく。

「佐伯　地形圖」

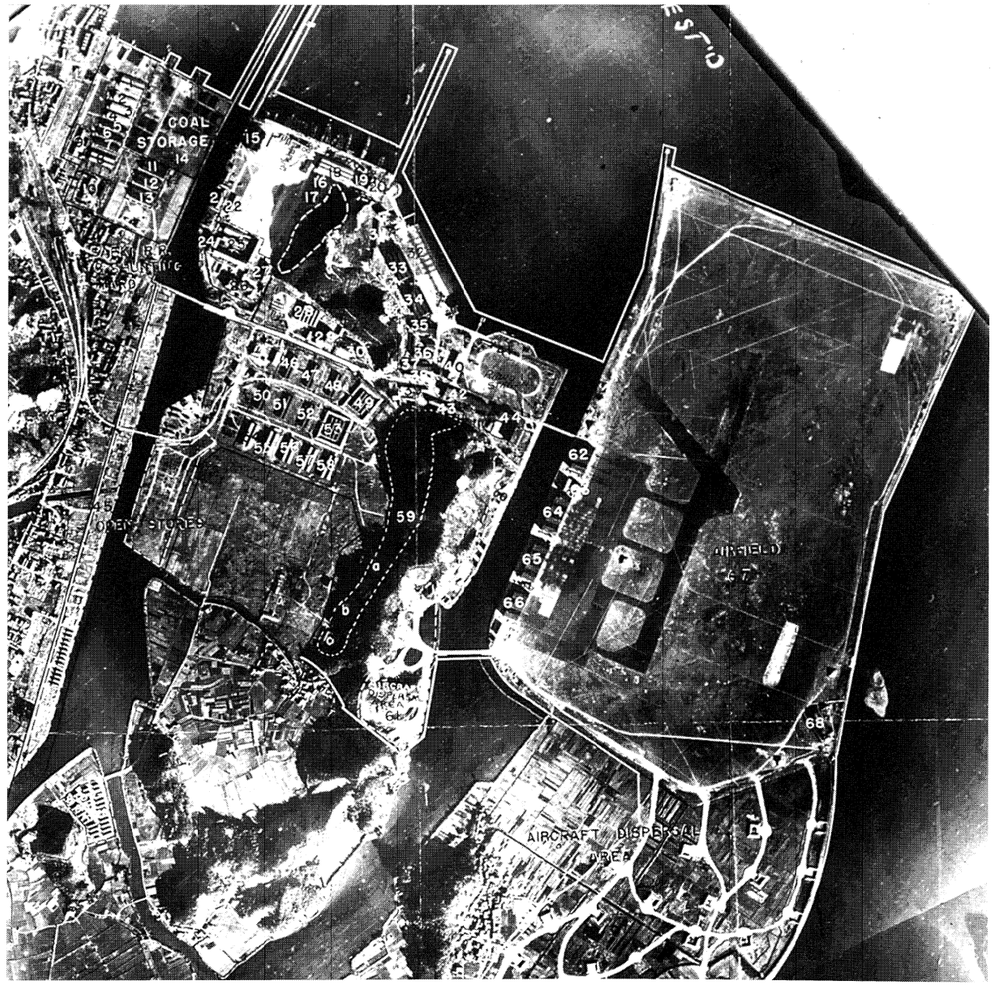
縮尺 1/25000、陸軍参謀本部陸地測量部作成、幅 594mm、高さ 500mm、昭和２年測図、昭和５年９月 25 日発行。図中女島より北東方向に文久三年（1863）築城の台場が確認できる。その後海軍航空隊飛行場建設のため取り壊される。



第 16 図 「佐伯　地形圖」

佐伯海軍施設航空写真解析図

国立国会図書館所蔵ＵＳＳＢＳ「空襲損害評価報告書」より、原図縮尺 1/6000。空爆開始前に攻撃目標対を判別するために昭和20年５月７日作成されたもので破壊される以前の軍事施設配置が分かる。同年１月１日撮影写真を下地として同年３月 28 日撮影のものと対照し[2] 報告されている。図中の番号は個々の施設に振られたもので、施設名称等については報告書に掲載されている。この中で施設番号 30 のみ不明とされているが、病院（病舎）であることがわかっている[3]。



第 17 図　佐伯海軍施設航空写真解析図

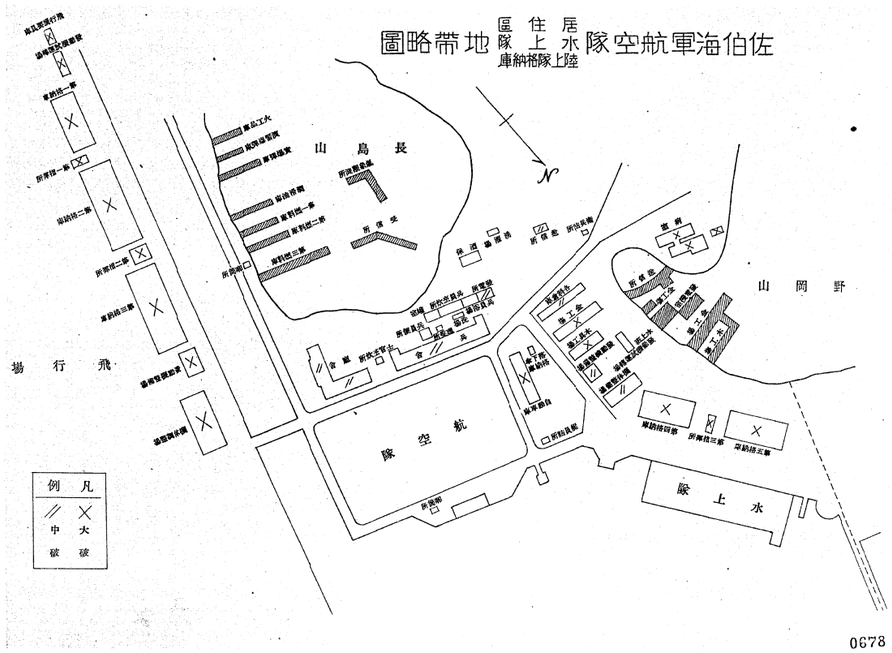
佐伯防備隊兵器装備一覧

『佐伯防備隊戦時日誌』（自昭和 20 年２月１日至昭和 20 年２月 28 日）中に掲載されている。現在は失われている野岡山（濃霞山）の対空火力がわかる。

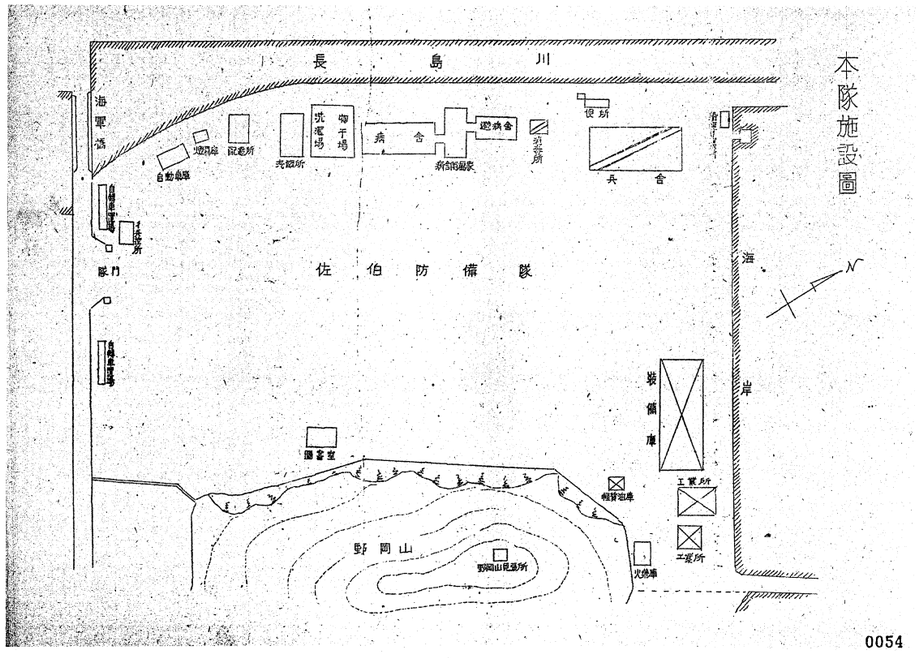
「佐伯海軍航空隊・居住區．水上隊．陸上隊格納庫・地帯略圖」「佐伯防備隊本隊施設圖」

防衛庁防衛研究所図書館所蔵「佐伯地区引渡目録資料」、戦後海軍施設を GHQ に引き渡すため、作成されたものの２頁分。防備隊資料は昭和 20 年８月 31 日、航空隊資料は同９月１日に作成されている。共に同じ配置の資料が九州財務局大分財務事務所に保管されていたが今回の調査では確認できず、防衛庁防衛研究所図書館のものを掲載した。また、今回別の資料から第 18 図中の飛行場にある第２指揮所の位置が誤記されていることが判明した。[4]

区分	配備	兵器装備		
科海航	仮見張所設	水ノ子	十二糎望遠鏡	一
		大島	八糎双眼望遠鏡	一
			九七式特五号送信機	一
			九二式電波鑑査機改一	一
			十二糎望遠鏡	一
			ＴＭ式経便電信機	一
科信通	電探所	沖ノ島	七倍稜双眼鏡	一
		深島	仮称三式一号電波探信儀一型改一	二
			仮称三式一号電波探信儀一型改一	二
	送信所	下信所	九二式電波鑑査機改一	一
		堅田送信所	九五式短三号送信機	一
			九七式特五号送信機	一
	受信所	防備隊庁舎	九二式電波鑑査機改一	一
			九二式受信機改四	八
科術砲	機銃砲台	沖ノ島	九三式十三粍単装一型改一	二
		深島	九三式十三粍単装一型改一	二
		大分砲台	九三式二十五粍単装一型改一	六
		錬兵所	九三式十三粍単装一型改一	四
		野岡山	九六式十三粍　四聯装	一
	高角砲台	女島	八八式四〇口経七糎高射砲	六
	海面砲台	鵜来島	武式四米半　測巨儀	一
			須式百十糎　探照灯	一
			四〇口経安式十五糎砲	三
		芹崎	武式四米半　測巨儀	一
			須式百十糎　探照灯	一
			四〇口経安式十五糎砲	三
			九二式電波鑑査機改一	一
			九六式二十五粍二聯装	七
			九七式特五号送信機	一
			九五式短三号送信機	一
			九二式電波鑑査機改一	一
			九二式受信機改四	八
			九二式電波鑑査機改一	一
			九二式短電波鑑査機改一	一
			九二式特受信機	一
			九二式短電波鑑査機	一
			七倍稜双眼鏡	一
			仮称電波探知機	一
			仮称電波探知機	一
			九二式短電波鑑査機改一	一
			二号無線電話機	一
			九二式四号送信機	一
			九二式短電波鑑査機改一	一
			九二式電波鑑査機改一	一
			二号無線電話機	一
			九二式特受信機	一
			九二式短電波鑑査機	一
			十二糎双眼望遠鏡	一
			九二式短



第 18 図　「佐伯海軍航空隊・居住區．水上隊．陸上隊格納庫・地帯略圖」



第 19 図　「佐伯防備隊本隊施設圖」

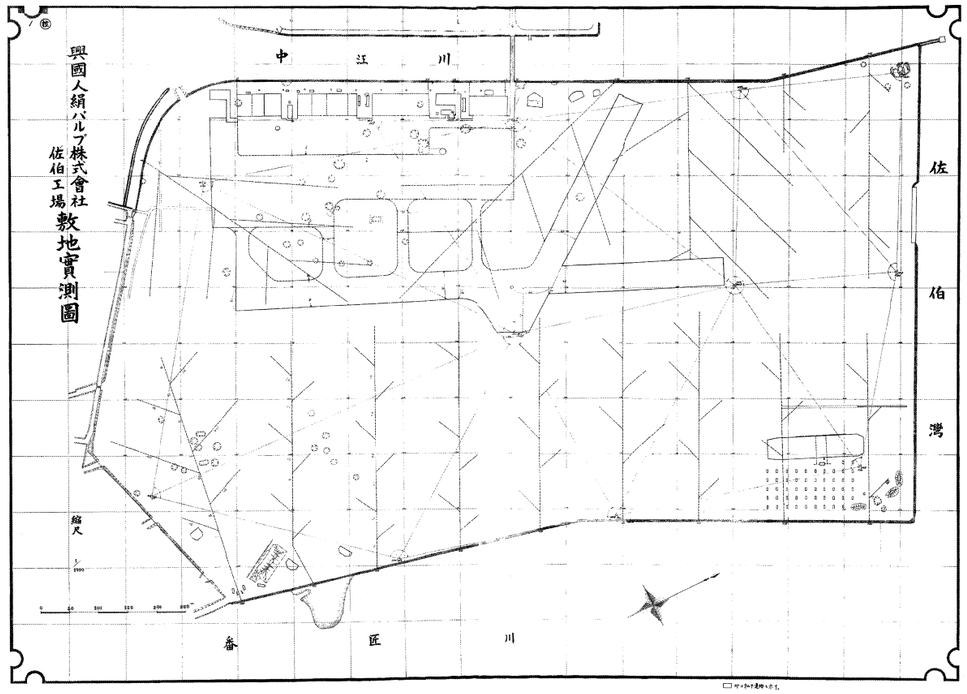
佐伯海軍航空隊飛行場爆撃時航空写真

国立国会図書館憲政資料室所蔵ＵＳＳＢＳ「空襲損害評価報告書」より、昭和 20 年 5 月 11 日に撮影されたものである。飛行場南側の東西に広がる爆煙について、同報告書中には爆弾の破裂は 27 発と記されている。現在も海上自衛隊佐伯分遣隊庁舎（旧航空隊庁舎）には、この時建物を貫通した不発弾の補修痕が残っている。

「興國人絹パルプ株式會社佐伯工場敷地實測圖」写

福西正道氏所蔵、縮尺 1/1700、昭和 24 ～ 27 年の間作成、幅 1020mm、高さ 746mm。工場着工前に作られた敷地測量図。敷地全体に枝状に伸びる破線は暗渠、破線で引かれた円は主に 20 年 5 月 11 日空襲時の着弾炸裂痕である。100m 間隔で方眼線が引かれ、交点には水準値も記入されている。掩体壕は今回の調査対象３基の他３基が左下に見える。図中右下に描かれている大小方形の構造群の性格は不明である。

第 20 図　佐伯海軍航空隊飛行場爆撃時航空写真



第 21 図 「興國人絹パルプ株式會社佐伯工場敷地實測圖」 写

註 1　米国戦略爆撃調査団 (United States Strategic Bombing Survey：USSBS) は、第二次世界大戦終結後、米軍による戦略爆撃の効果を検証するため設けられた米陸海軍の合同機関で、ヨーロッパ戦域と太平洋戦域でそれぞれ調査を行い最終報告書 (Final Reports) をまとめた。その際に収集した資料の名称。

註 2　昭和 20 年 3 月 18 日空襲時の損傷等を対照し考察を加えている。

註 3　本書第 18 図「佐伯航空隊・居住區 . 水上隊 . 陸上隊格納庫・地帯略図」（p .30 参照）

註 4　口絵に掲載した清水建設株式会社所蔵「佐伯航空隊陸上班」写真に各施設名が裏書されている。工事請負業者の完成写真記録として信頼性が高い。

第３表　年表

西暦	年号	対外・内政	市　政	軍　事
1869	明治2	東京遷都、版籍奉還	毛利高謙版籍を奉還し佐伯藩知事となる	
1871	明治4	廃藩置県 日清修好条規調印	7-14 廃藩置県の詔勅が下り佐伯県となり、佐伯城三の丸御殿を庁舎とする 11 豊後7県を併せて大分県とする	
1872	明治5	陸・海軍両省設置	大分県支庁を佐伯に置く、県内10支庁を8大区とする	
1873	明治6	徴兵令公布		
1875	明治8	讒謗律・新聞紙条例公布	塩屋村と大船繋村とが合併し大分県第4大区26小区佐伯村となる	
1877	明治10	西南戦争おこる		5 薩摩軍300名が市街に突入、船頭町商家山内八郎兵衛宅を本部とする　海軍の浅間艦、守後沖に来り砲門を開いて賊を攻撃する 12 岡ノ谷に陸軍墓地を設け、戦死者を葬る
1879	明治12	琉球処分(沖縄県をおく)	山際に南海部郡教員伝習所できる 佐伯第百九国立銀行開業	
1880	明治13	集会条例制定	8 汽船「佐伯丸」進水する	
1882	明治15	軍人勅諭発布	佐伯町、城下から葛港への道路が開通	
1883	明治16	徴兵令改正	9 月本弥吉、佐伯港(葛港)を開築する	
1886	明治19			岡ノ谷、陸軍墓地に敵愾ノ碑建設される
1889	明治22	大日本帝国憲法発布	4-1 市町村制施行され、佐伯町発足、初代町長に古賀直衛就任	
1893	明治26	文官任用令公布	暴風雨は洪水となり市街家屋過半数浸水	
1894	明治27	日清戦争はじまる		11 大手前で戦勝祝賀大会
1895	明治28	下関条約調印、三国干渉		
1900	明治33	治安警察法公布、軍部大臣現役武官制確立		
1902	明治35	日英同盟締結		
1904	明治37	日露戦争はじまる		
1905	明治38	ポーツマス条約調印		1 旅順陥落、祝勝会を盛大に行う 3 奉天占領、学校生徒の旗行列、全町をねる 6 日本海海戦の勝報いたり郡会議事堂で大勝利祝賀
1906	明治39	統監府開庁、関東都督府設置		2 高等小学校で凱旋兵士141名を招き祝勝歓迎会、旗行列、提灯行列で戦勝を祝賀する
1909	明治42	伊藤博文ハルピンで暗殺される	佐伯電灯会社設立、12月初めて電灯つく	
1911	明治44			10 東宮殿下、海軍大演習で佐伯湾に行啓
1912	大正1		電話開始 9 暴風雨、大洪水で被害甚大	
1914	大正3	第一次世界大戦に参戦		9 大入島石間山上に駐蹕記念碑建つ
1916	大正5		佐伯町会、佐伯の読み方をサイキと決定 10 日豊線佐伯駅まで開通	
1918	大正7	米騒動、シベリア出兵		休戦祝賀提灯行列
1919	大正8	ベルサイユ条約調印		5 佐賀関-高島-佐田岬の線に防備砲台を築城決定
1920	大正9	国際連盟に加入		8「築城部豊予支部」を佐賀関に設置
1922	大正11	ワシントン海軍軍縮条約調印		
1924	大正13		西上浦村宮ノ内大火13戸焼失	
1925	大正14	治安維持法、普通選挙法成立		
1926	大正15			8 陸軍大臣より鶴見崎砲台の工事実施が下命される 「豊予要塞司令部」が佐賀関に発足
1928	昭和3	張作霖爆死事件		天皇陛下、連合艦隊演習統監のため佐伯湾に行幸
1930	昭和5	ロンドン海軍軍縮条約調印	佐伯町火災26戸全焼、茶屋ヶ鼻橋及び蛇崎橋開通する	
1931	昭和6	満州事変		2-28 町議会にて海軍航空隊を佐伯に誘致することを満場一致で決定 3 海軍航空隊設置促進運動高まり期成会発足 4 航空隊誘致運動効を奏し、候補地女島沖ノ州の測量が開始される 4-5 朝日座で町民大会を開催 8 海軍航空隊設置決定、海軍航空隊用地買収終わる 9 豊予要塞鶴見崎砲台竣工 11 初旬女島埋め立て着工

西暦	年号	対外・内政	市　政	軍　事
1931	昭和6			12 中旬長島側着工
1932	昭和7	満州国発足		1 長島水上飛行場をはじめ、庁舎や兵舎建築用地の埋立て着工　佐伯駅より、航空隊正門に通ずる幅員5間の道路着工　長島川を渡る橋(海軍橋)着工
1933	昭和8	国際連盟脱退		1 中江川架橋着工　上水道工事、庁舎、兵舎、その他付属建築物着工 4 水上機滑走台完成
1934	昭和9	ワシントン海軍軍縮条約破棄	佐伯町火災20戸焼失	2-15 佐伯海軍航空隊開隊、呉海軍軍需部の佐伯支庁発足 大分憲兵隊佐伯分遣隊開隊 10 航空隊庁舎完成 11 佐伯海軍航空隊、竣工祝賀会盛大に挙行
1935	昭和10	政府国体明徴声明		3-15　陸上飛行場・格納庫完成 海軍橋完成
1936	昭和11	ロンドン軍縮会議脱退 日独防共協定締結		
1937	昭和12	盧溝橋事件、日中戦争はじまる 日独伊防共協定締結	4 佐伯町、鶴岡村・上堅田村と合併、人口22956人、戸数4631戸	7-11 第12航空隊、佐伯航空隊基地で開隊、第2聯合航空隊(第2艦隊)編入 9-5 第3艦隊編入 12 南京陥落、祝賀提灯行列
1938	昭和13	国家総動員法公布		3 防空演習実施される
1939	昭和14	国民徴用令、価格統制令公布		11-3 佐伯防備隊開隊
1940	昭和15	日独伊三国軍事同盟締結、北部仏印進駐		11-15 第12航空隊、中国方面艦隊直属となる
1941	昭和16	日ソ中立条約調印、南部仏印進駐 真珠湾攻撃、太平洋戦争開始	4-29 佐伯町、八幡村、大入島村、西上浦村を廃しその区域をもって佐伯市を置く、初代市長郷田兼安就任、人口36972人、戸数6782戸	9-15 第12航空隊解散 真珠湾攻撃を前に佐伯湾に連合艦隊集結
1942	昭和17	6 ミッドウェー海戦		1-11 鶴見崎砲台爆破事故 11 金属資源回収実施、防空訓練強化 主食の配給に加え、衣料品、塩、木炭等配給制となる
1943	昭和18	学徒出陣	9 番匠川大洪水により市街全域浸水、伝染病発生する	7-1 第331航空隊(艦戦・艦攻)、佐伯航空隊基地で開隊 佐伯海軍航空隊、呉鎮守府から呉防備戦隊に編入
1944	昭和19	2 決戦非常措置要綱決定 6 サイパン島陥落 本土空襲本格化		戦局悪化にともない、市民防空壕づくり、勤労奉仕作業につとめる 佐伯中学・佐伯高女の生徒、福岡・佐伯の軍需工場に動員される 2-1 第931航空隊(97艦攻隊他)開隊、本部設置 3 佐伯航空隊基地勤務者として、女性電話事務員14名採用 9-1 第933航空隊、水上偵察機隊開隊
1945	昭和20	4-1 米軍、沖縄上陸 8-6 広島・8-9 長崎に原爆投下 8-14 ポツダム宣言受諾 8-15 天皇、終戦の詔勅放送	7 強制疎開始まる	3-18 8：30ごろ艦載戦闘機による初空襲 4-26 B29最初の空襲、城山頂上の毛利神社本殿、佐伯中学校舎、佐伯駅周辺、馬場の共同防空壕に爆弾落下、この日一日で46名爆死 4-29 陸軍56戦隊、飛燕15機来る 5-4 米軍機による空襲、飛行機の被害飛燕10機 5-11 4度目の空襲(B29)、庁舎を中心に投弾、庁舎を貫く不発弾が一発 5-13 米軍機動部隊九州沖に接近、艦載戦闘機の攻撃により防備隊全焼 5-14 主として航空隊を襲う、格納庫を初め飛行場、滑走路、その他壊滅的被害 6-23 10：00ごろB29 1機灘区に投弾 7-20 佐伯海軍航空隊、第8特攻戦隊に編入 7-24 小型機20機2度にわたって航空隊周辺に投弾 7-25 6：00と12：00の2度にわたり機銃掃射を繰り返す 8-14 西谷にロケット弾11発落下(死亡4名　負傷7名)

第Ⅴ章　まとめ

今回の現地調査で濃霞山45基、長島山61基、興人4基、総数110基（内地下壕43基）の日本海軍に関する遺構の分布と残存状況が確認できた。最後に史料調査により判明した遺構の機能、施設名を合わせて佐伯海軍航空隊、佐伯防備隊及び関連施設の成立過程をⅢ期に分けまとめとする。

Ⅰ期　昭和8～16年12月（佐伯海軍航空隊施設着工～真珠湾攻撃開始前）

長島山に境界石（長島山29・36～39）[1]が設置され、航空隊施設に着工、庁舎、兵舎等が完成し、昭和9年2月15日佐伯海軍航空隊が開隊する。航空隊附属施設である木工場（濃霞山1）、第一燃料庫（長島山7）、第二燃料庫（長島山6）、潤滑油庫（長島山8）、実爆弾庫（長島山9）、演習爆弾庫（長島山10）、火工品庫（長島山11）[2]、建設に関する記録は確認できなかったが、その工法、構造から成立をこの時期と考えた。次いで昭和10年3月15日に陸上飛行場が完成[3]、第二指揮所（興人4）[4]もこれと同時期に建てられたと考えるのが妥当であろう。

昭和14年11月3日[5]には佐伯防備隊が開隊し、付属施設として火薬庫（濃霞山5）[6]と工業部（濃霞山13）、内務科特務部（濃霞山14）、砲術科（濃霞山15）、掃海部（濃霞山16）、測圖部防空壕（濃霞山17）[7]の各地下壕が造られる。これらの建設時期の特定はできないが施設の性格上この時期とする。

特記すべき遺構は二重巻立構造の長島山11である。壕内を低温低湿に保ち、保管する火工品の性能を永く保持させるための特有の構造が見られる。

Ⅱ期　昭和16年12月～20年3月（真珠湾攻撃後～本土決戦準備）

昭和19年1月掩体壕（興人1他）建設位置設定のため測量が行われる[8]。

この時期の末になると戦局悪化のため、市民の勤労奉仕により市内各所に防空壕が造られた。また海軍地上施設の機能も随時地下壕内に移管され、本調査で多数確認できた素掘の壕も同時期から掘削が開始されたと考えられる。

昭和20年3月18日佐伯市は初空襲を受け、濃霞山機銃陣地から米国艦戦に対し応戦する[9]。長島山機銃陣地（長島26－1～4）は境界的に航空隊管轄であるためか防備隊史料には載っておらず、装備を示す史料は確認できなかった。配備された機銃の型式を濃霞山装備[10]と長島山機銃台座の遺構観察より推測し挙げるとすれば、96式25粍2連装が有力であるが確定はできなかった[11]。この後同年4月には航空隊の戦闘指揮所（長島山30）[12]が航空隊庁舎後背の長島山中腹に完成している。鉄筋コンクリート造、厚さ1.2mの外壁はおよそ250kg爆弾の直撃に耐えられるように造られている。

Ⅲ期　昭和20年4月～同年8月15日（本土決戦体制～終戦）

市内への空襲は、昭和20年3月18日に始まり、同年8月14日まで断続的に続いた。

濃霞山、長島山には円形の窪地（濃霞山44・45、長島山31～35）が点在し、大きいもので直径15m、深さ3mを測る。表土の薄い硬質の岩盤を抉っていることから倒木の根痕とは考え難く、1948

年米国極東空軍の空撮写真に残る痕と位置が合うものもあり、空襲時の爆弾の炸裂痕と考えられる。防備隊受信所（濃霞山 19・34）[13] をはじめその他の素堀の壕は、完成することなく終戦を迎える。

以上 12 年間の遺構の編年を断片的であるが試みた。遺構に対する記録資料の裏付けにより、本遺跡には日中戦争から太平洋戦争終結までの時期、歴史的に重要な役割を果たした軍事施設が数多く存在することがわかった。今回調査した地下壕群、掩体壕等の他にも航空隊庁舎、第 2 指揮所等が残されている。さらに、空襲による爆弾の炸裂痕も明瞭に確認できた。市街地にもかかわらずこれらの遺構が破壊を免れ、ほぼ良好な状態で残存する遺跡は国内でも数少なく、貴重な遺産であるといえる。

戦後 60 年が経過し今回の調査は行われた。既にかなりの遺構が姿を消し、多くの記録史料がその特殊性もあり廃棄、散逸している。当時の記憶を持っている方も少なくなってきている。そのような中、市民の皆様をはじめ関係各位の多大な御協力をいただき、本調査報告書を刊行することができた。ここに感謝の意を記し、結びの言葉とする。

註 1　山口県教育庁文化財保護課編 『山口県の近代化遺産』1998（p.119）を参照

註 2　本書第 18 図「佐伯海軍航空隊・居住區 . 水上隊 . 陸上隊格納庫・地帯略圖」（p.30）を参照

註 3　豊州新聞社 「豊州新報」 昭和 8 年～同 14 年

註 4　本書先述の註 4（p.32）を参照

註 5　註 3 に同じ

註 6　本書第 19 図「佐伯防備隊本隊施設圖」（p.30）を参照

註 7　各遺構に所属部名を刻んだ標識が取り付けられている。

註 8　当時測量に従事していた女島在住の岩本幸作さんの証言

註 9　『佐伯防備隊戦闘詳報　第一號』を参照

註 10　本書第 2 表　佐伯防備隊兵器装備一覧 （p.29）を参照

註 11　遺構の円形部に 96 式 25mm2 連装機銃を据えると平面的には収まり、射角 20°～85° となる。しかし側壁の孔の奥行は 22cm なので、25mm 箱型弾装（幅 43cm、高さ 26cm、厚み 9 cm）を縦に置くと 4 cm 程外に突き出る。

註 12　河野豊編『追体験佐伯と海軍』（p.48）を参照

註 13　九州財務局大分財務事務所資料 「旧佐伯防備隊見取圖 73・76」より

【参考文献】　浄法寺朝美 『日本築城史』 1971　原書房

海軍施設系技術官の記録刊行委員会編 『海軍施設系技術官の記録』 1972

財団法人　海軍歴史保存会編 『日本海軍史』 1995

神戸輝夫編 『おおいたの戦争遺跡』2005

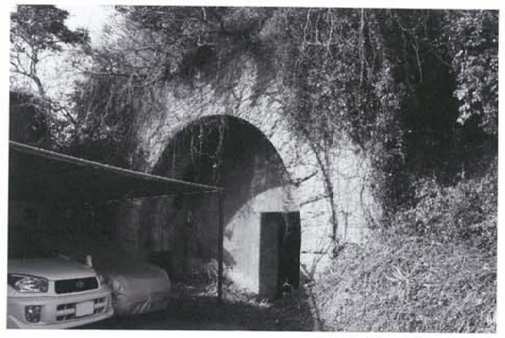
図版 1

濃霞山（南西から）

長島山（西から）

長島山山頂　機銃台座跡

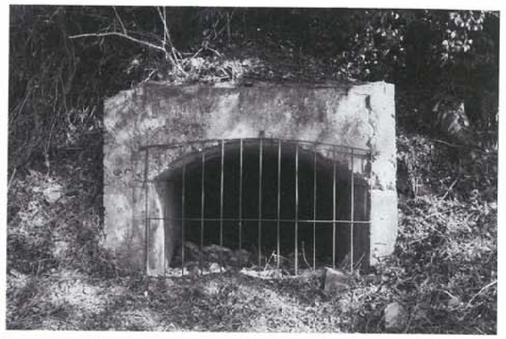
掩体壕



濃霞山１

濃霞山５

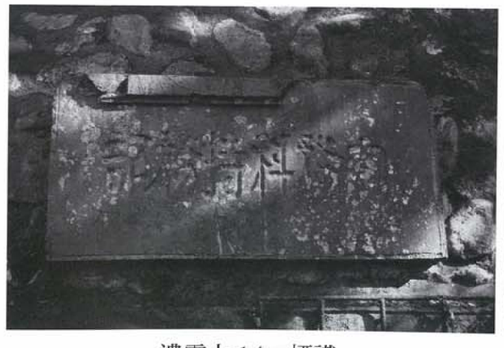
濃霞山８



濃霞山 11

濃霞山 13　標識

濃霞山 13



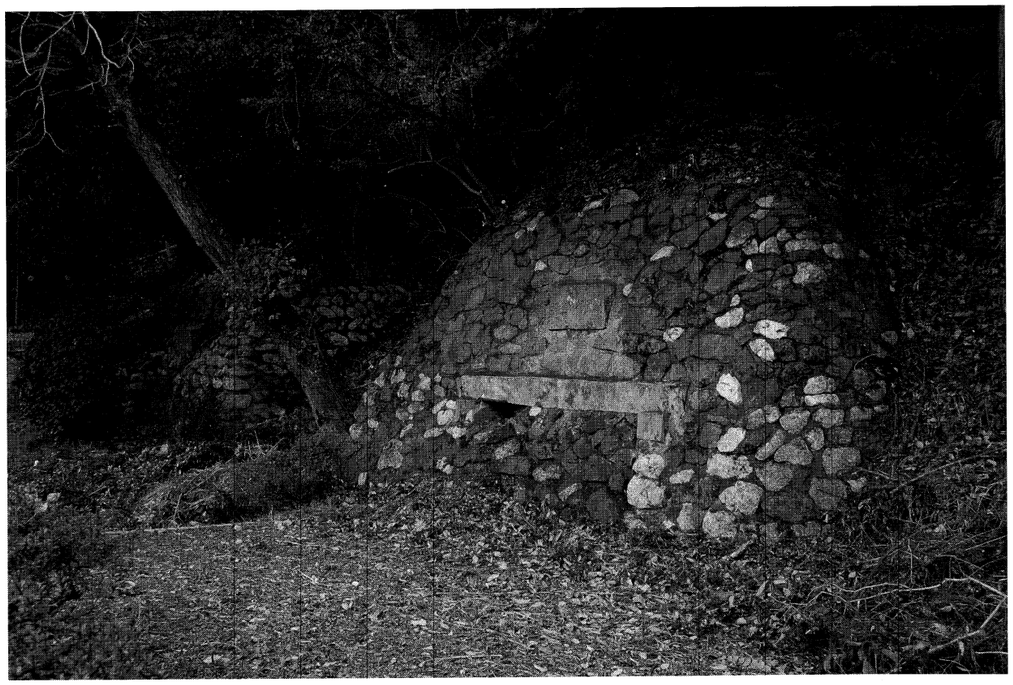
濃霞山 14　標識

濃霞山 14

図版 4

濃霞山 15　標識

濃霞山 15



濃霞山 16・17

濃霞山 16　標識

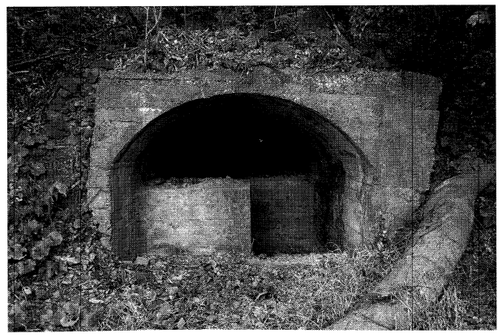
濃霞山 16

図版 5

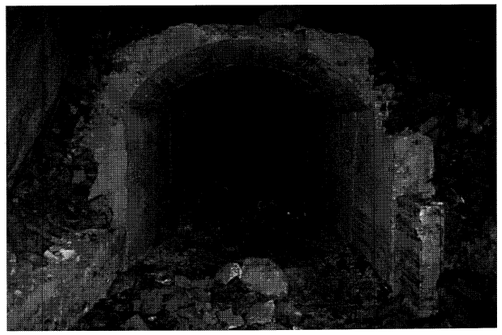
濃霞山 17　標識

濃霞山 17

濃霞山 18



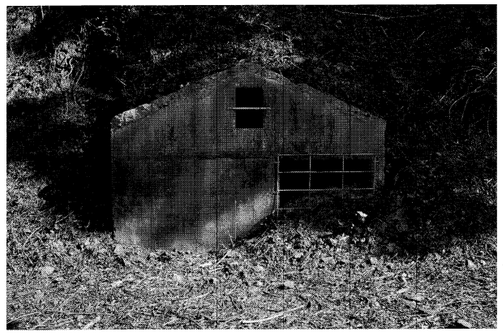
濃霞山 19



濃霞山 19　内部施工途中

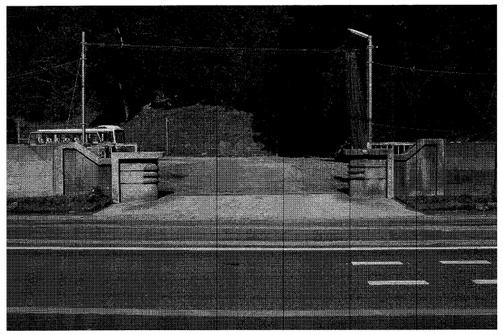
図版 6

濃霞山 34

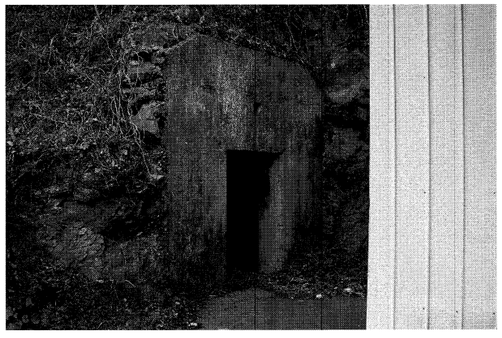


濃霞山 23

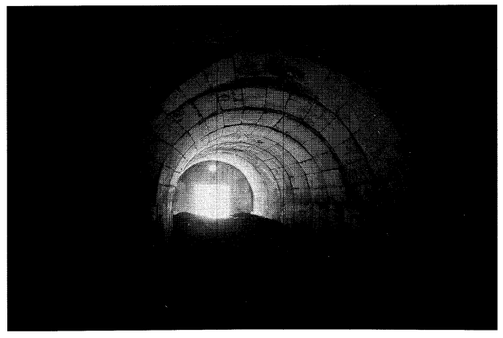
濃霞山 27



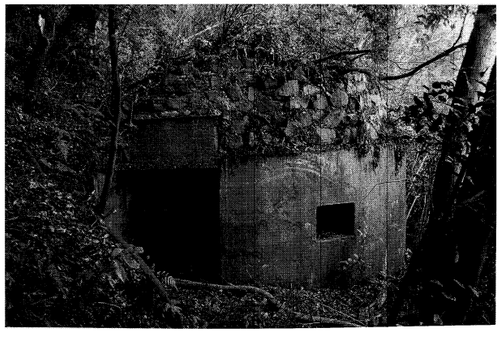
濃霞山 28



濃霞山 30



濃霞山 30　開口部（壕内より）



濃霞山 39

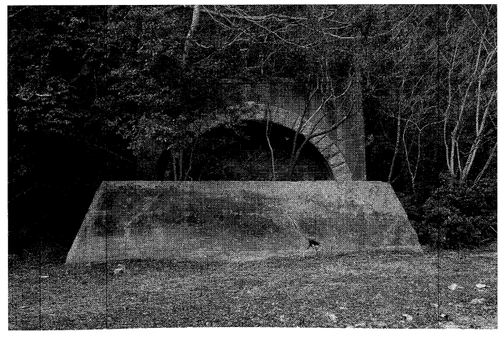
濃霞山 43

図版 7

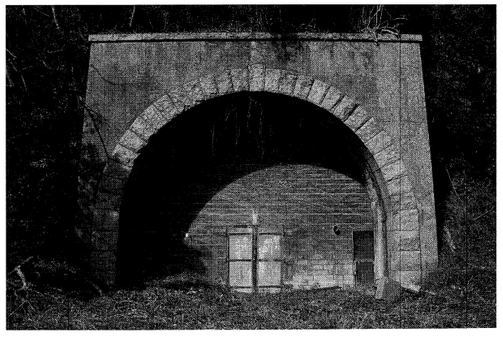
長島山 5 ～ 11

長島山 6

長島山 8



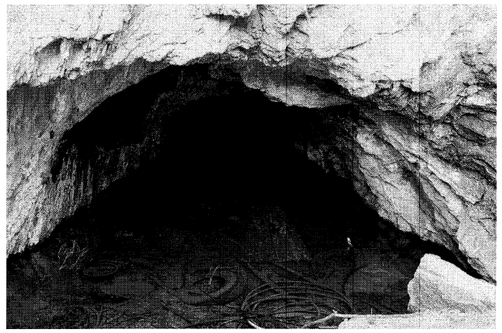
長島山 9



長島山 11

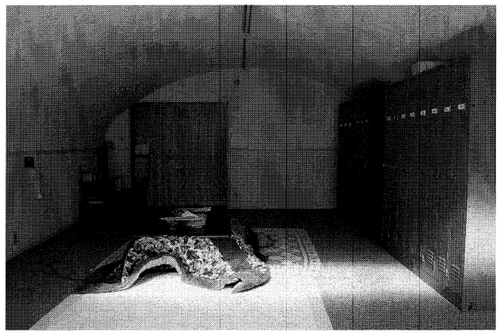
図版 8

長島山 11　被弾状況

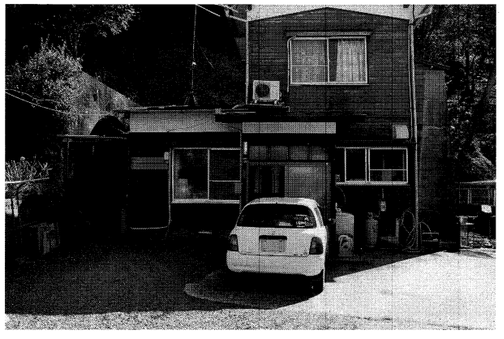


長島山 13

長島山 15　（長島山 15 は建物に内包）

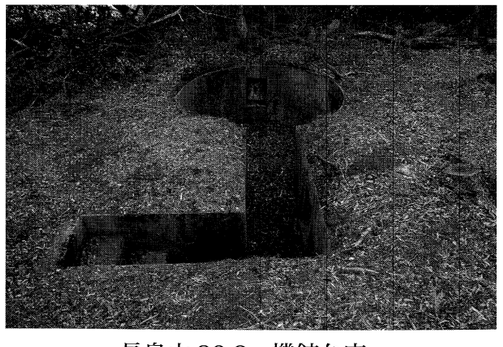


長島山 15



長島山 17　（右は障壁）

長島山 26 北　全景



長島山 26-2　機銃台座

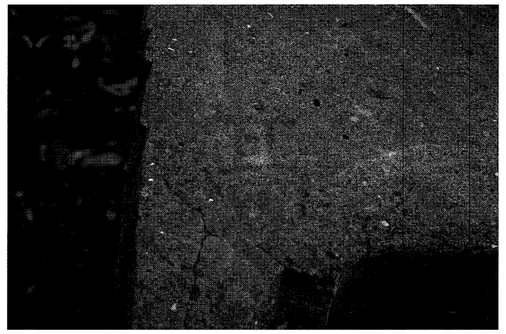
長島山 26-2　機銃台座軸受部

図版 9

長島山 26-5　掩廠部天蓋

長島山 26-6

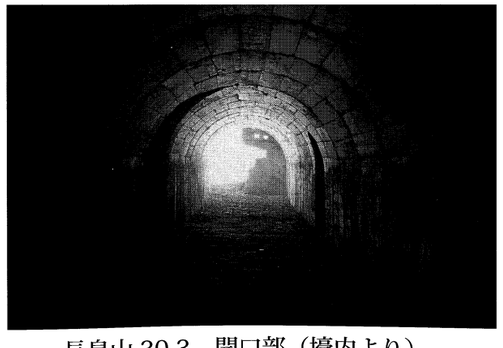
長島山 26-10　建物跡（正面より）



長島山 26-10　水槽縁に「高」の字

長島山 30-1・8 ～ 11

長島山 30-3　開口部（壕内より）



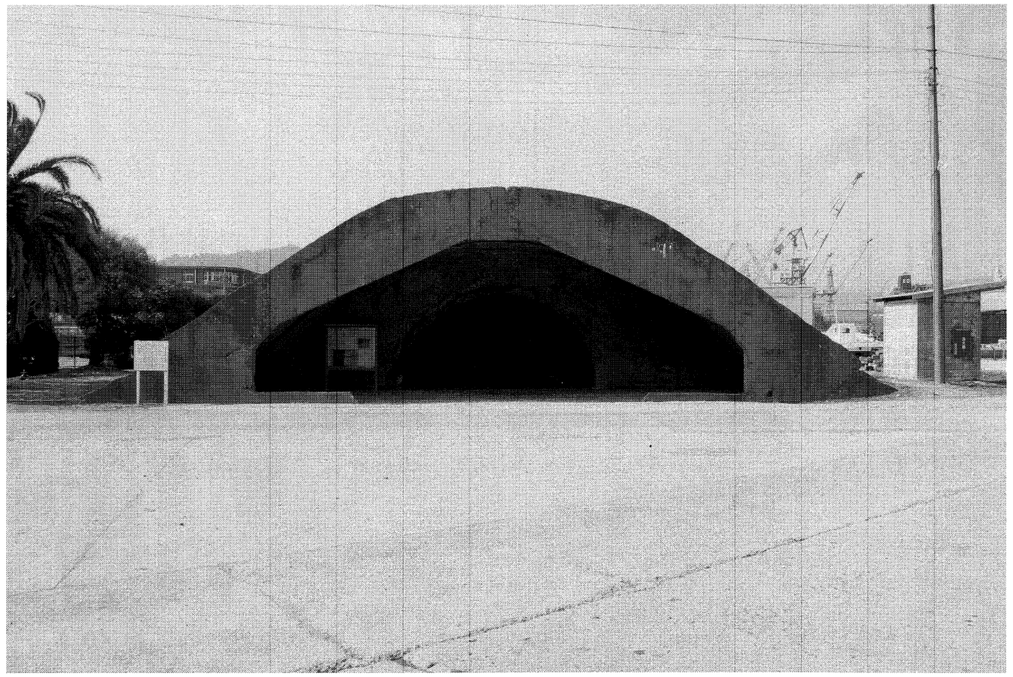
長島山 30-3　開口部（壕内より）

長島山 30-6

図版 10

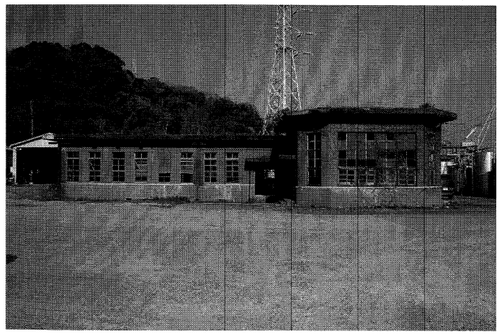
長島山 34　(白線が範囲)

長島山 38　境界柱



興人 1　掩体壕

興人 3　掩体壕



興人 4

報 告 書 抄 録

ふりがな 書　名	さいきしせんそういせき　のおかやま　ながしまやま　こうじん 佐伯市戦争遺跡　濃霞山－長島山－興人
副 書 名	平成16・17年度遺跡分布及び残存状況調査報告書
巻　次	
シリーズ名	
編集者名	吉武　牧子 大谷　伸宏
編集機関	佐伯市教育委員会 ㈱埋蔵文化財サポートシステム　大分支店
所 在 地	〒876-8585　大分県佐伯市中村南町4番1号 〒870-0942　大分県大分市大字羽田97番地1
発 行 年	2006年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
さいきしせんそういせき 佐伯市戦争遺跡	おおいたけんさいきし 大分県佐伯市	430						
のおかやま 濃霞山	つるやまちちょうめ 鶴谷町2丁目 12427番6他			32° 58′ 22″	131° 54′ 32″	05. 1. 28 ～3. 22	81072	
ながしまやま 長島山	なかえまちばんほか 中江町12401番 1他			32° 58′ 02″	131° 54′ 45″		130813	
こうじん 興人	ひがしはまばんほか 東浜11763番他			32° 58′ 03″	131° 54′ 12″	06. 1. 30 ～3. 29	9000 計=220885	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯市戦争遺跡 濃霞山 長島山 興人	海軍施設	近代	コンクリート建築物 地下壕		

平成16・17年度
遺跡分布及び残存状況調査報告書

佐伯市戦争遺跡

濃霞山―長島山―興人

2006年10月31日

発　行　佐伯市教育委員会
〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
TEL 0972-22-3111

印　刷　元屋印刷株式会社
〒876-0811 大分県佐伯市鶴谷町3丁目1番9号
TEL 0972-24-0900